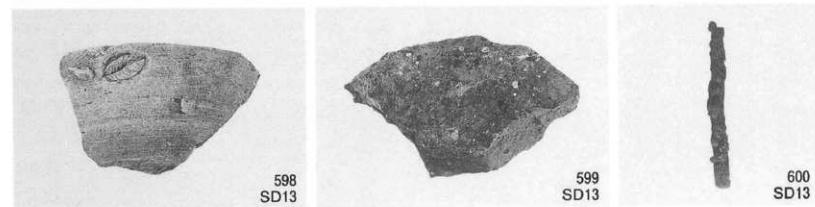




SD13



SD22

図版56 SD13・22 内出土遺物写真 土師器・鍛冶関連製品・鉄製品

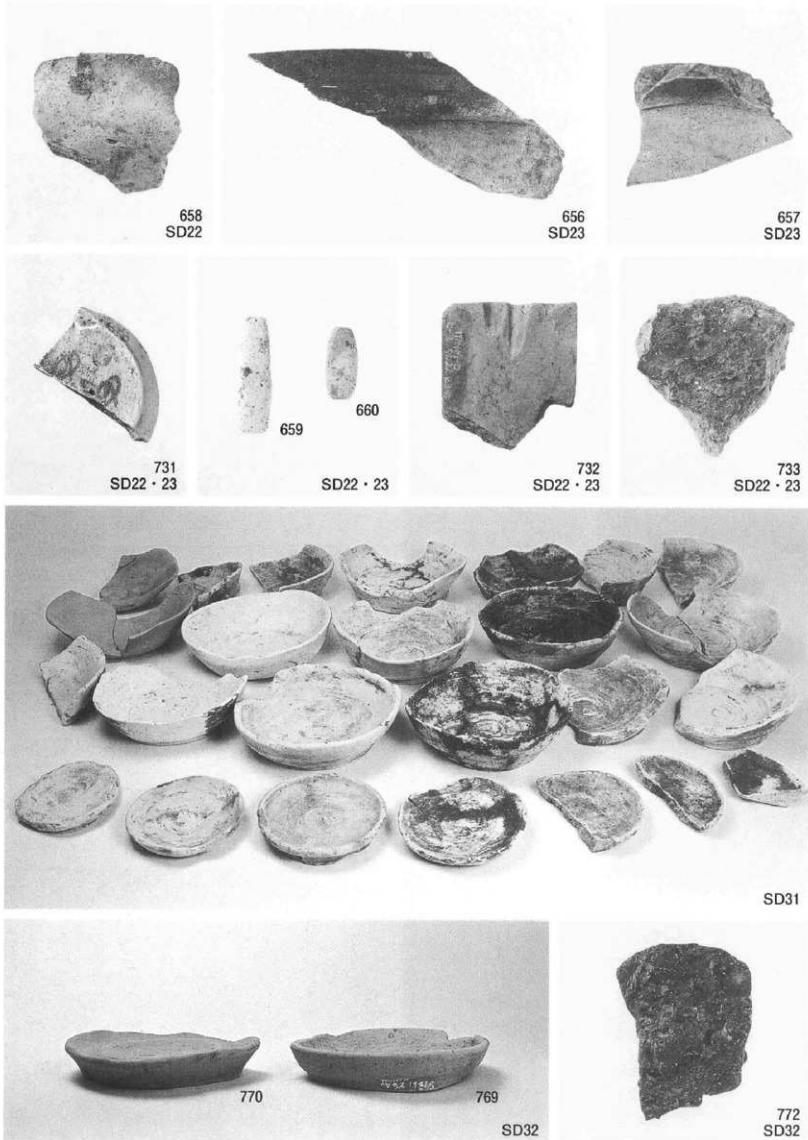


SD23

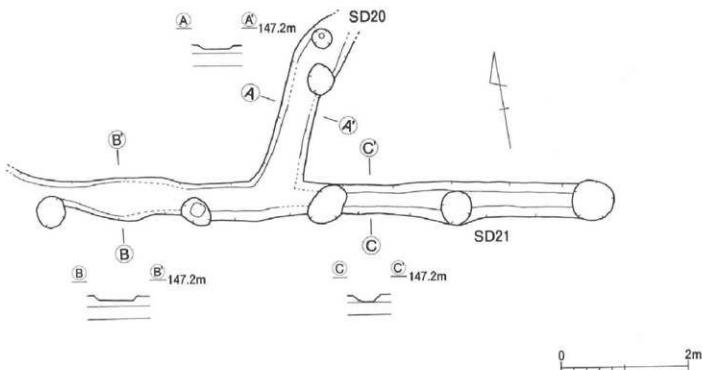


SD22・23

図版57 SD22・23 内出土遺物写真 土師器



図版58 SD22・23・31・32 内出土遺物写真 土師器・石製品・土製品・鍛冶関連製品・鉄製品



第89図 SD20・21 実測図

2号敷石状遺構

(SS02: 第111~113図・第65・66表・図版77~79)

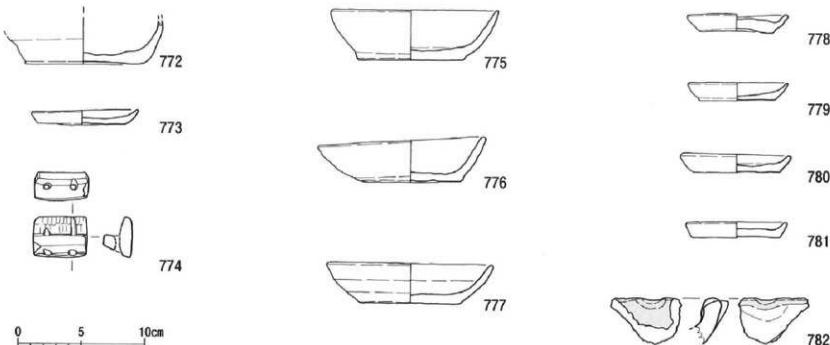
D地区、シ-26区からス-28区で確認した。「コ」字状に検出しており、西側は調査区外へのびている。敷かれているのは小石・礫と土師器片が主である。所々には土師器片の密集域ができていた。東側中央付近には一塊の小さな集石状の遺構がある。北側部分はやや北西方向に湾曲して調査区外へ消える。幅員は1m程度であった。

895は白磁碗の底部片で、内面に樹描文が施されている。碗V~VII類に相当するものである。896は白磁碗の底部片で碗IV~VII類に相当するものである。897は瓦質土器火鉢の口縁部片で、外面は菊の印花文が施されており、著しく摩耗している。

総重量が32,025gであった。大多数のものに炭化物、鉄分の付着が見られる。898~909は壊である。898、899はB類小型に分類される。898、899は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。900~903はB類中型に分類される。900は底部下端が張り出し、糸痕跡が残る。底部から体部にかけて曲線的に立ち上がるが、一部には緩やかな屈曲も見られる。901、902は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。902は体部外面に明瞭なロクロ口が残る。903は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。底部下半に明瞭なロクロ目が残る。904はB類大型に分類される。底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。外面にはロクロ口目が残る。905~908はC類中型に分類される。905~907は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。908は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。器壁がやや厚く、内面における底部と体部との境がやや不明瞭である。器壁に黒斑が生じているなど、SK01出土の壊と様相が近い。909は器高が2.9cmとやや低めである。底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて曲線的



図版59 SD20・21 写真

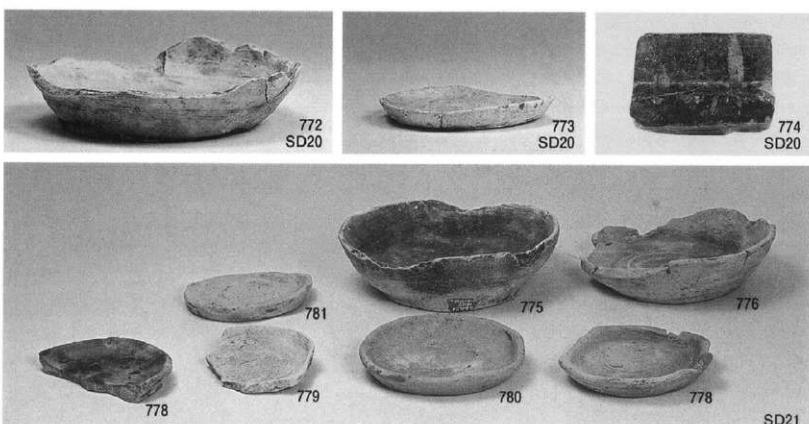


第90図 SD20・21 内出土遺物実測図 土師器・石製品・鍛冶関連製品

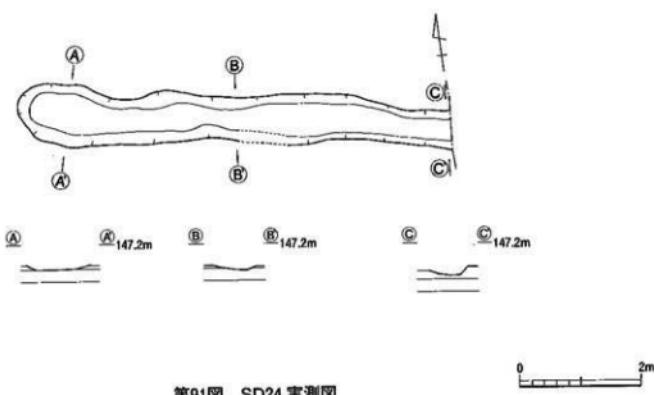
SD20 772~774
SD21 775~782

測定番号	種別	器種	出土層 構	調 整(外面)	調 整(内面)	色調(外面)	色調(内面)	胎 土	L径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	備 考
772	土師器	壺	SD20	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	~	8.8	~	回転系切 内外指頭痕
773	土師器	小皿	SD20	回転ナデ	回転ナデ→笛ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	2mm以下の鉢物・砂粒	8.4	6.8	1.2	回転系切
774	滑石製品	-	SD20	-	-	-	-	-	4.2	3.1	2.2	40g 石調転用穿孔
775	土師器	壺	SD21	回転ナデ	回転ナデ→笛ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	13.2	8.6	4.0	回転系切
776	土師器	壺	SD21	回転ナデ	回転ナデ→笛ナデ	浅黄褐 (7.5YR8/3)	浅黄褐 (7.5YR8/3)	4mm以下の鉢物・砂粒	13.3	8.4	3.3	回転系切 ナデ 底部に貫通している穿孔 滑耗
777	土師器	壺	SD21	回転ナデ	回転ナデ→笛ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	13.2	8.0	3.2	回転系切 板状底痕 滑耗
778	土師器	小皿	SD21	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	2mm以下の鉢物・砂粒	8.1	6.0	1.4	回転系切 指頭痕
779	土師器	小皿	SD21	回転ナデ	回転ナデ→笛ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/4)	ごく微少の鉢物・砂粒	8.0	6.2	1.4	回転系切 板状底痕
780	土師器	小皿	SD21	回転ナデ	回転ナデ	根 (5YR7/6)	根 (5YR7/6)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.4	6.6	1.5	回転系切 指頭痕
781	土師器	小皿	SD21	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	浅黄褐 (7.5YR8/3)	浅黄褐 (7.5YR8/3)	2mm以下の鉢物・砂粒	8.0	7.0	1.3	回転系切 ナデ
782	鍛冶関連	培塿	SD21	ナデ	-	-	-	2mm以下の鉢物・砂粒	-	-	-	片口 治織物 外指頭痕

第53表 SD20・21 内出土遺物観察表 土師器・石製品・鍛冶関連製品



図版60 SD20・21 内出土遺物写真 土師器・石製品



第91図 SD24 実測図

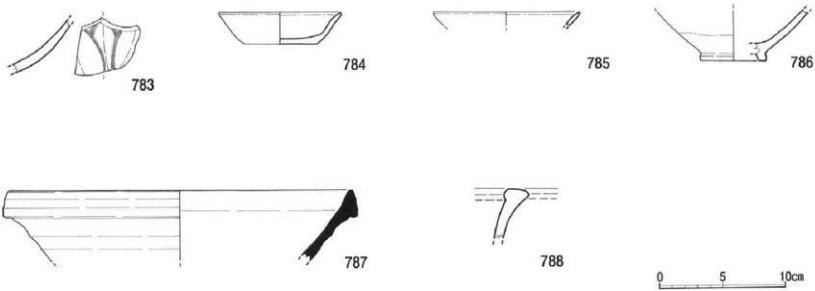
に立ち上がる。

910~933は小皿である。910はA類中型に分類される。底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部をやや薄く仕上げる。911はB類小型に分類される。底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。焼成は堅緻である。912~919はB類中型に分類される。912は底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。913は底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。914、915は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。916は底部下端がわずかに張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。917は底部下端がやや張り出す。底部から体部にかけて段差が形成され、口縁部をやや薄く仕上げる。底部内面を平坦に調整する。底部に穿孔を施す。918は底部下端がわずかに張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。919は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて外反しながら立ち上がる。口縁部から底部内面までが浅く、焼成はやや堅緻である。920~928はB類大型に分類される。920は底部下端が若干張り出す。底部から体部にかけて段差が形成され、体部はやや曲線的に開く。口縁部から底部内面までが浅い。921は底部から体部にかけて外反気味に立ち上がる。922は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部を薄く仕上げる。口縁部から底部内面までがごく浅い。923、924は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部をやや薄く仕上げる。口縁部から底部内面までがごく浅い。925は底部下端が張り出す。底部から体部にかけて曲線的に立ち上がるが、一部には段差が形成される。926は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部をやや薄く仕上げる。口縁部から底部内面までがごく浅い。927は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。928は器高が1.9cmとやや高い。底部下端が張り出す。底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。929、930はC類中型に分類される。929は底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。930は底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。焼成はやや堅緻である。931~933はC類大型に分類される。931は底部下端がやや張り出す。底部から体部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部をやや薄く仕上げる。底部がやや厚く、円盤状を呈する。932は底部下端が大きく張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。933は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。

934は坪口縁部かと考えられる。外面に墨書きを行う。判読不明である。その他、935は基石と考えられる。黒色系の色調を呈する。936、937は鉄釘である。L字状の頭部を呈すると考えられる。

3号敷石状遺構 (SS03: 第114~116図・第67・68表・図版80~82)

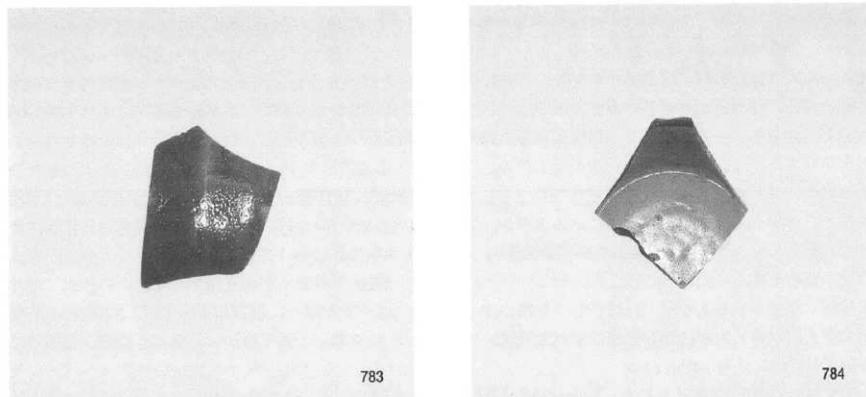
D地区、ニ-24区からネ-28区で確認した。逆「L」字状に検出しており、西側は調査区外へのび、南側は消失している。敷かれているのは小石・礫と土器片が主である。幅員は80cm程度であった。SS02との対比



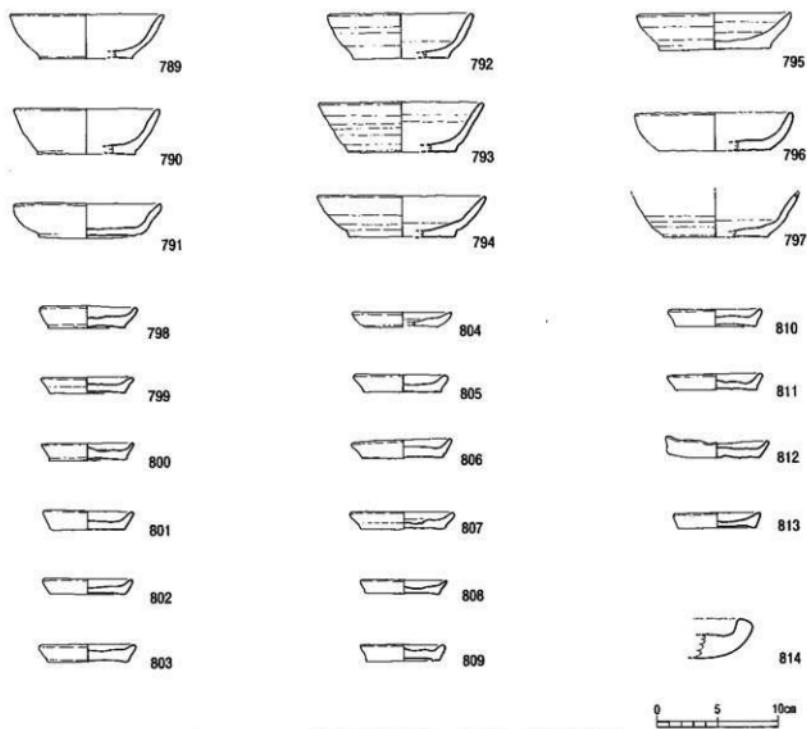
第92図 SD24 内出土遺物実測図 陶磁器

番号	種別	器種	出土層	調 整(外面)	調 整(内面)	胎 土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
783	青磁	瓶	SD24	施釉	施釉	灰白色	—	—	—	龍泉窯系碗II-2b類
784	白磁	瓶	SD24	施釉	施釉	灰白色	10.7	5.6	2.5	(反転復元) 壺IV類
785	白磁	瓶	SD24	施釉	施釉	灰白色	11.6	—	—	(反転復元) 壺III類
786	白磁	碗	SD24	施釉	施釉	灰白色	—	5.1	—	(反転復元) 碗II-3類
787	東播系頸壺器	鉢	SD24	回転ナマ	回転ナマ	褐灰色	27.2	—	—	(反転復元)
788	瓦質土器	火合?	SD24	回転ナマ	回転ナマ	にじみ褐色	—	—	—	

第54表 SD24 内出土遺物観察表 陶磁器



図版61 SD24 内出土遺物写真 陶磁器



第93図 SD24 内出土遺物実測図 土師器・鐵冶関連製品

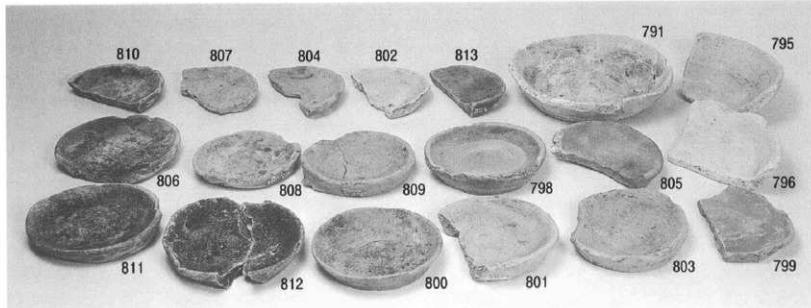
でみれば、これも恐らくは「ロ」字状に土師器や小石が敷かれていたと思われる。

938は白磁碗の体部片である。碗IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。939、940は東播系須恵器鉢の口縁部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。941は常滑品口鉢の口縁部片で、高台が付かないタイプと思われる。6期に相当し13世紀代に産するものと推察される。942は備前窯の口縁～頸部片で、口縁形態が玉縁状をなしており14世紀前半の產と思われる。943は備前窯の口縁～肩部片で、口縁がたれており13世紀代の產と思われる。944は備前窯の底部片で、内・外面の一部に自然釉がかかるており、底部内面に砂目積みの痕跡と思われる砂粒の付着がみられる。

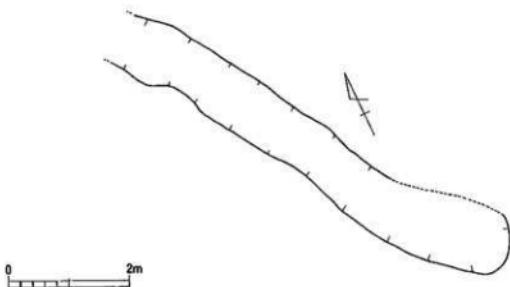
出土土師器の総重量は20,480gであった。大多数のものに炭化物、鉄分の付着が見られる。945～959は坏である。945～950はB類中型に分類される。945、946は底部下端が若干張り出し、体部は一旦屈曲した後、直線的に立ち上がる。946は焼成がやや堅硬である。947、948は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。947は外面に工具による厚痕が残る。949は底部下端がやや張り出し、底部は薄い円盤状を呈する。体部は曲線的に立ち上がる。950は全体的に器壁が厚い。底部下端が張り出し、体部は一旦屈曲した後、曲線的に立ち上がる。951～953はC類小型に分類される。951は器高が2.7cmと低い。底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。952、953は底部下端が大きく張り出し、体部はやや曲線的に立ち上がる。953は器形に大きな歪みが生じている。954～956はC類中型に分類される。954は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。体部内外面にロクロ目が残る。955は底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がり、口縁部が外反する。内面には器壁の剥落が見られる。956は底部下端がやや張

指紋番号	種別	器種	出土層位	調査(外面)	調査(内面)	色調(外面)	色調(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
789	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	ごく微小の鉢物・砂粒	12.8	7.8	3.7	回転糸切 内部一部指ナデ 薄く鉄分付着
790	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/2)	にふい・黄褐色 (10YR7/2)	ごく微小の鉢物・砂粒	12.1	8.1	3.7	反転復元 回転糸切 内面指頭痕 内外灰化物 鉄分付着
791	土師器	坏	SD24	回転ナデ→指ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐色 (7.5YR8.3)	浅黄褐色 (7.5YR8.3)	3mm以下の鉢物・砂粒	12.2	8.0	2.9	回転糸切 外面指頭痕 磨耗
792	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	12.2	8.1	3.7	回転糸切 板状圧痕 反転復元
793	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の鉢物・砂粒	13.8	9.0	4.1	回転糸切 外一部指ナデ 内外薄く鉄分付着 反転復元
794	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	14.1	9.0	3.4	回転糸切 板状圧痕 外一部指ナデ 内面指頭痕
795	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	12.6	9.0	3.0	回転糸切 板状圧痕 外面頭痕 反転復元
796	土師器	坏	SD24	-	-	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の鉢物・砂粒	13.1	9.3	3.1	磨耗 反転復元
797	土師器	坏	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の鉢物・砂粒	-	8.7	-	回転糸切 反転復元
798	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	7.7	6.1	1.7	回転糸切 指頭痕 内面指頭痕
799	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	灰 (7.5YR7/6)	灰 (7.5YR7/6)	2mm以下の鉢物・砂粒	7.8	6.3	1.3	回転糸切 指頭痕 内底クロロ目 反転復元
800	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の鉢物・砂粒	7.4	6.1	1.4	回転糸切 指頭痕 内底指頭痕 化物付着
801	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	3mm以下の鉢物・砂粒	7.5	6.2	1.5	回転糸切 板状圧痕
802	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	2mm以下の鉢物・砂粒	7.5	6.2	1.3	回転糸切 反転復元
803	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.1	6.5	1.4	回転糸切
804	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	3mm以下の鉢物・砂粒	8.9	7.2	1.2	回転糸切 底部に穿孔 反転復元
805	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.0	6.6	1.5	回転糸切 薄く内底クロロ目 外灰化物付着
806	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.5	7.0	1.5	回転糸切 板状圧痕 内薄く鉄分付着
807	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.8	7.2	1.4	回転糸切 内底クロロ目
808	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にふい・褐色 (7.5YR7/4)	にふい・褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の鉢物・砂粒	7.1	6.1	1.2	回転糸切 頭痕
809	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・褐色 (7.5YR7/4)	にふい・褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の鉢物・砂粒	7.1	6.5	1.5	回転糸切 指頭痕 内指頭痕
810	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	5mm以下の鉢物・砂粒	7.8	6.8	1.4	回転糸切 内外灰化物付着
811	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の鉢物・砂粒	8.1	7.1	1.3	回転糸切 指頭痕 内外鉄分付着
812	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	2mm以下の鉢物・砂粒	8.3	7.1	1.5	回転糸切 指頭痕 外部指頭痕 鉄分付着
813	土師器	小皿	SD24	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にふい・黄褐色 (10YR7/4)	にふい・黄褐色 (10YR7/4)	5mm以下の鉢物・砂粒	7.2	6.5	1.3	回転糸切 内底クロロ目 反転復元
814	鍛冶関連	坩埚	SD24	-	-	-	-	3mm以下の鉢物・砂粒	-	-	-	溶融物 外指頭痕

第55表 SD24 内出土遺物觀察表 土師器・鍛冶関連製品



図版62 SD24 内出土遺物写真 土師器



第94図 SD25 実測図

り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。体部外面にロクロ目が残る。957、958はC類大型に分類される。957は器高が4.5cmと高い。底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。958は底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。959は底部～体部片である。底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。

960～977は小皿である。960～965はB類中型に分類される。960は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけてやや外反気味に立ち上がる。961～965は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。964は底部下端に糸痕跡が残る。966～969はB類大型に分類される。966は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて薄く段差が形成される。口縁部をやや薄く仕上げる。焼成はやや堅緻である。967は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。口縁部を薄く仕上げ、底部内面を平坦に調整する。焼成は堅緻である。968、969は底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。968は底部内面を平坦に調整し、口縁部から底部内面までが浅い。970はC類中型に分類される。底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。971～977はC類大型に分類される。971は底部下端が大きく張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。底部内面中央が大きく凹む。972は底部下端が若干張り出す。底部から体部にかけて段差が形成され、口縁部を薄く仕上げる。底部内面中央が大きく凹む。973は器高が1.2cmとやや低い。底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや山線的に立ち上がる。974、975は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。焼成は堅緻である。974は口縁部を薄く仕上げる。976は底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。977は器高が1.2cmとやや低い。底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。焼成は堅緻である。

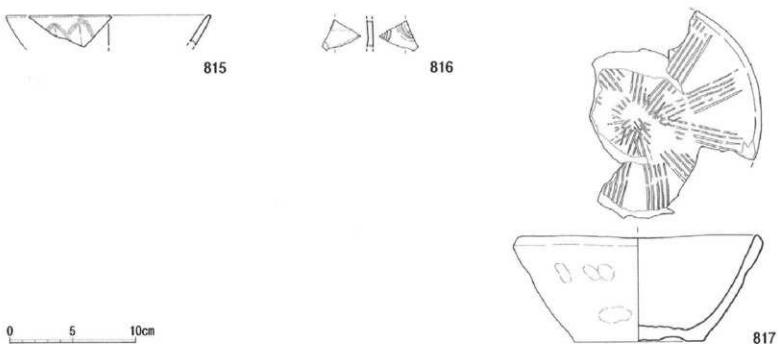
978は石鍋口縁部片である。断面台形を呈する鋸を削りだす。外面に炭化物の付着が見られる。979は鉄釘と考えられる。両端を欠損する。

1号竪状遺構 (ST01 : 第117図・図版83)

D地区の東側、グリッド：ノーヒー26～30区において確認している。中央やや北よりにサブトレチを設定したため、破壊してしまっているが、北端と南端部分は南北方向に竪軸があり、中央部分は東西方向に竪軸が走行する。

1号石積土坑 (SR01 : 第118図・図版84)

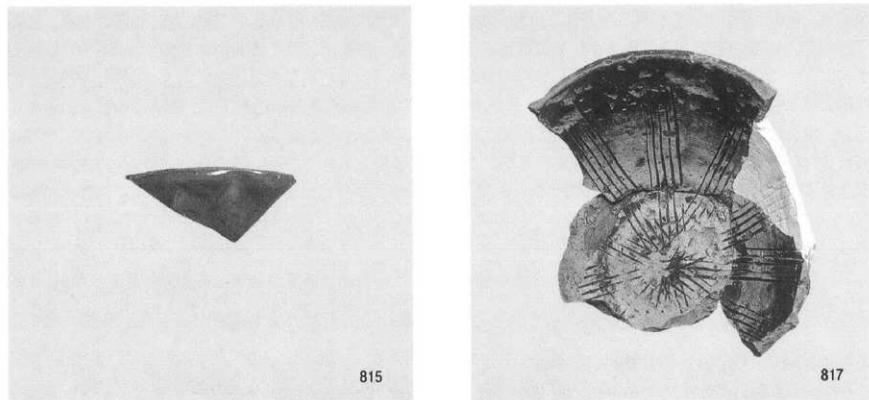
シ-24区にある。SB01の内に位置するが、軸方向が違い、また切り合いもない。長軸約1.5m、短軸約1mを測る。底面と側面には石が敷き詰められていた。石を積み上げる際には粘土などで裏込めを行った跡がみられた。積まれた石の最高位から底面までの深さは90cmほどである。底面には水分をおおく含み粘性のある炭



第95図 SD25 内出土遺物実測図 陶磁器

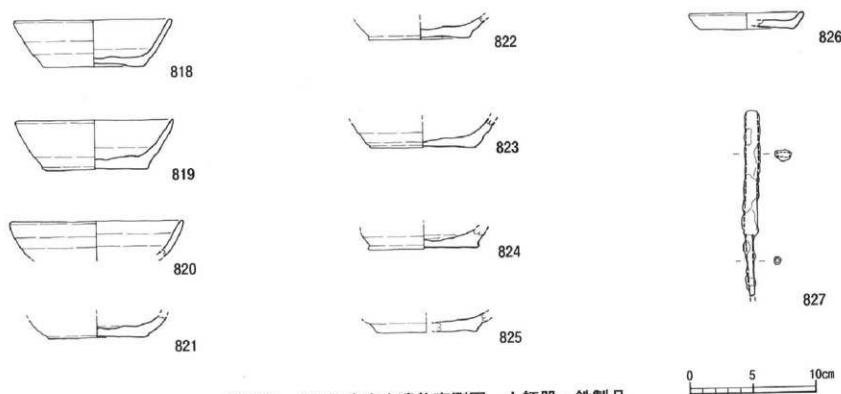
掲載番号	種別	器種	出土層構	調整(外側)	調整(内側)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
815	青磁	碗	SD25	施釉	施釉	灰白色	16.2	-	-	(反転復元) 龍泉窓系碗Ⅱ-b類
816	青白磁	梅瓶小口	SD25	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	外面に鶴唐文?あり
817	瓦質土器	桶体	SD25	上方向のハケメ	横方向のハケメ	灰黄色	19.8	10.2	8.4	(反転復元) 外面に指継压痕をのこす

第56表 SD25 内出土遺物観察表 陶磁器



図版63 SD25 内出土遺物写真 陶磁器

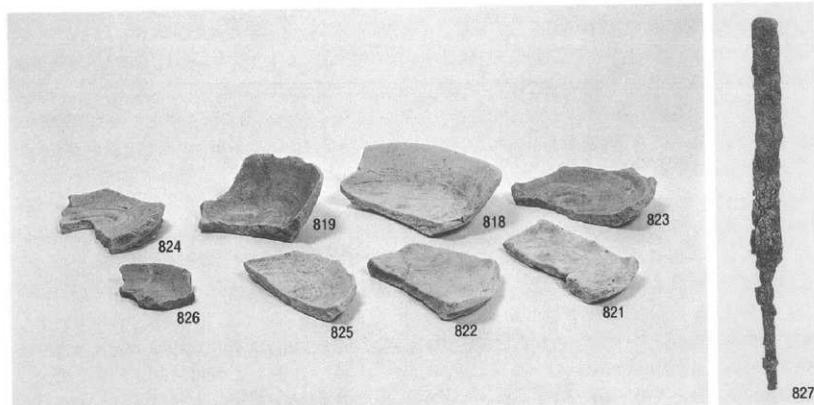
化物がうっすらと一面に残っていた。横市川を挟んで対面に位置する加治屋遺跡では鎌倉期の大規模な建物群が確認されているが、ここでは同様の遺構が3基見つかっている。加治屋遺跡のそれはすべて、下層にうすく炭化物が堆積し、疊は内側に面した部分のみが赤色化していたことから、中で火を焚いたと想定されている。機能・性格は不明としているものの、本遺跡のそれも、同様の使用がなされたと考えてもよい。



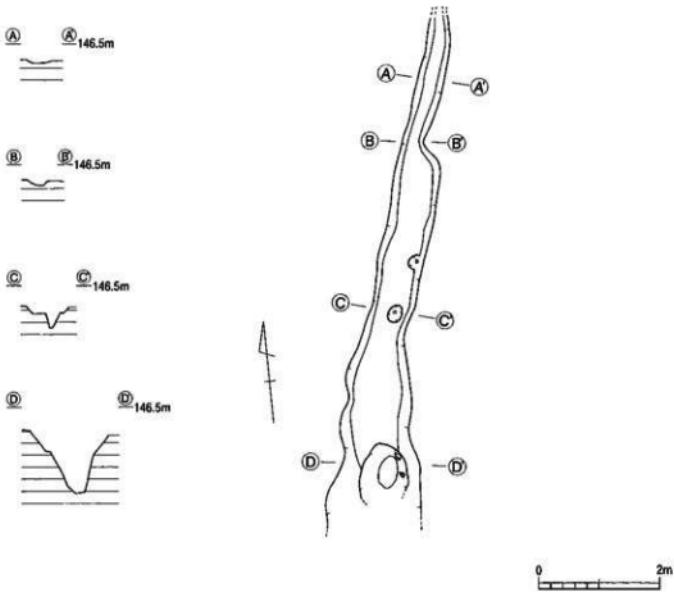
第96図 SD25 内出土遺物実測図 土師器・鉄製品

編號 記号	種 別	器 喩	出土層 遺 墓	調 整(外面)	調 整(内面)	色調(外面)	色調(内面)	胎 土	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
818	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の鉱物-砂粒	12.6	8.0	3.7	回転系切 板状圧痕 反転復元
819	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ	にぶい・黄褐 (10YR7/4)	にぶい・黄褐 (10YR7/4)	2mm以下の鉱物-砂粒	12.6	8.4	3.9	回転系切 外一部指ナデ 反転復元
820	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の鉱物-砂粒	13.8	-	-	反転復元
821	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	3mm以下の鉱物-砂粒	-	8.0	-	回転系切 板状圧痕 薄く内底ロク ロリ 反転復元
822	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (25YR8/1)	灰白 (25YR8/1)	2mm以下の鉱物-砂粒	-	8.2	-	磨耗 反転復元
823	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にぶい・塵 (7.5YR7/4)	にぶい・塵 (7.5YR7/4)	5mm以下の鉱物-砂粒	-	8.4	-	回転系切 板状圧痕 反転復元
824	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	2mm以下の鉱物-砂粒	-	8.8	-	回転系切 板状圧痕 反転復元
825	土師器	环	SD25	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の鉱物-砂粒	-	8.0	-	反転復元
826	土師器	小皿	SD25	回転ナデ	回転ナデ	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	1mm以下の鉱物-砂粒	9.2	7.4	1.3	回転系切 反転復元
827	鉄製品	鑿?	SD25	-	-	-	-	-	-	-	-	22.4g

第57表 SD25 内出土遺物観測表 土師器・鉄製品



図版64 SD25 内出土遺物写真 土師器・鉄製品



第97図 SD26 実測図

1号土師器窯り (SX01 : 第119図・第69表・図版85・86)

D地区の北西部で検出した。本遺跡の包含層中または遺構中からは大量の土師器片が出土しているが、ここは特に密集していた。土師器の密集に整然性は見受けられなかったが、この層上に水田が開かれた影響か、各々が水生作用による鉄分の付着によって、固くくっつきあつたような状況であった。

980~1014は土師器である。980~1001は壺である。980、981はB類大型に分類される。底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。体部外面にはロクロ目が残る。982~985はC類小型に分類される。982は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。983、984は底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。983は体部外面にロクロ目が残る。985~992はC類中型に分類される。985は底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。底部外面に強く押された痕跡が残る。986は底部下端が張り出し、体部は直線的に立ち上がる。987は器高が4.0cmとやや高い。底部下端が張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。988は底部下端がわずかに張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。989は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。990は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。991は底部下端が張り出し、底部は薄い円盤状を呈する。体部は曲線的に立ち上がる。992は底部と体部との境は不明瞭で、底面から引続いて緩やかに体部へと移行する。体部はやや曲線的に立ち上がる。鉄分の付着が全く見られない。993、994はC類大型に分類される。底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。994は鉄分の付着が全く見られない。995~1001は底部～体部片である。995~1000は底部下端がやや張り出し、底部から

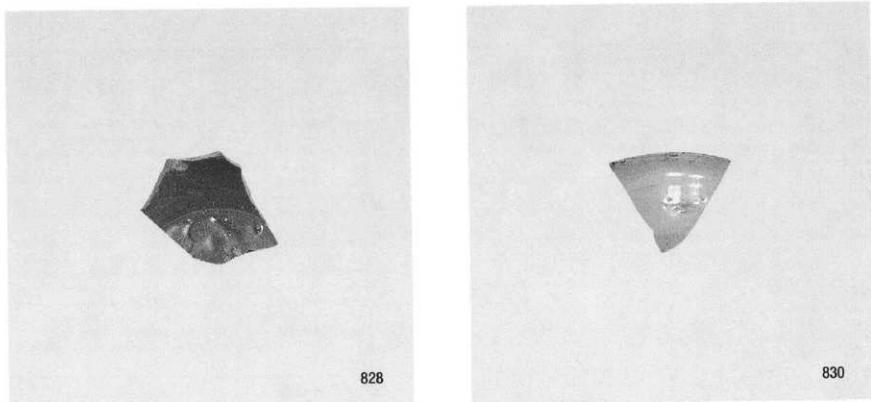
1002~1014は小皿である。1002はA類大型に分類される。底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。1003~1010はB類大型に分類される。1003~1005は底部下端がやや張り出し、底部から



第98図 SD26 内出土遺物実測図 陶磁器

掲載番号	種別	器種	出土層(構)	調整(外面)	調整(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
828	青磁	碗	SD26	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	(反転復元) 龍泉窯系碗I-2~4類
829	青磁	碗	SD26	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	龍泉窯系碗I-2類
830	白磁	皿	SD26	施釉	施釉	灰白色	11.8	-	-	(反転復元) 里皿類

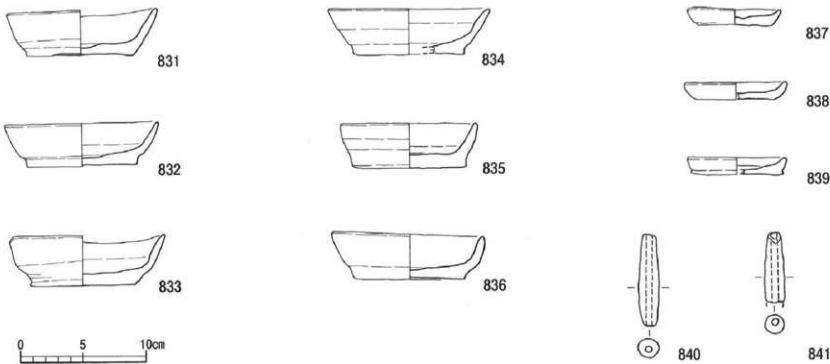
第58表 SD26 内出土遺物観察表 陶磁器



図版65 SD26 内出土遺物写真 陶磁器

体部にかけて直線的に立ち上がる。1006は器高が1.2cmと低く、底部下端が張り出し、底部から体部にかけて外反ながら大きく開く。口縁部から底部内面までがごく浅い。1007、1008は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。1009は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて外反気味に立ち上がり、口縁部を薄く仕上げる。1010は口径9.6cmと大きい。底部下端が張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部をやや薄く仕上げる。1011はC類中型に分類されるが、底部下端が張り出し、底部から体部にかけてやや曲線的に立ち上がる。口縁部から底部内面までがごく浅い。1012~1014はC類大型に分類される。1012は底部下端が大きく張り出し、体部は直線的に立ち上がる。1013は底部下端が張り出し、底部から体部にかけて外反気味に立ち上がる。底部の器壁が厚く、口縁部から底部内面までが浅い。1014は底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。

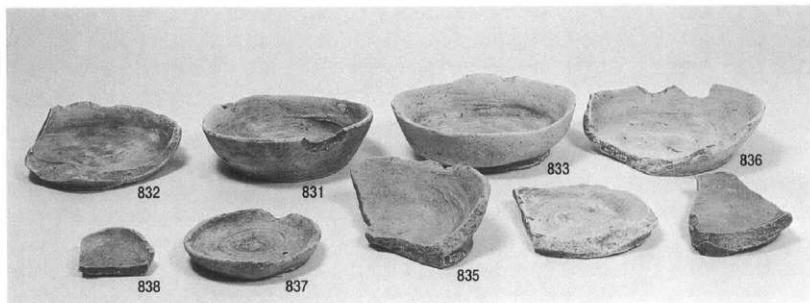
1015は滑石製品である。石鍋転用品と考えられる。表面には石鍋整形時のノミ痕跡が残り、長軸方向の破断面には丁寧な加工を施すが、短軸方向の破断面は未調整である。長軸に沿って穿孔を施す。1016は滑石製品である。下半を欠損する。穿孔を施すほか、擦痕が見られる。



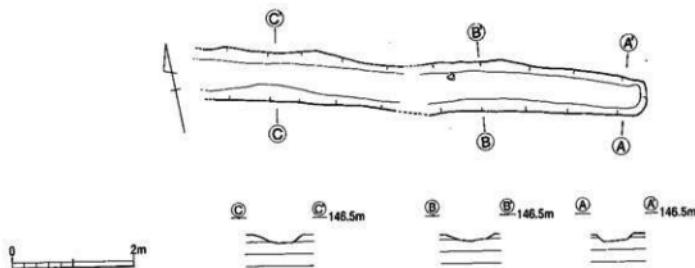
第99図 SD26 内出土遺物実測図 土師器・土製品

指標番号	種別	器種	出土層構	調査(外面)	調査(内面)	色調(外面)	色調(内面)	胎 土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
831	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の粘物・砂粒	12.0	8.3	3.4	回転系切 外面指頭痕 内底クロク 目
832	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐 (7.5YR8/4)	浅黄褐 (7.5YR8/4)	1mm以下の粘物・砂粒	12.4	8.4	3.4	回転系切 板状圧痕 反転復元
833	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/4)	浅黄褐 (10YR8/4)	2mm以下の粘物・砂粒	13.0	9.0	3.6	回転系切 板状圧痕 反転復元
834	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	4mm以下の粘物・砂粒	12.1	8.4	3.7	回転系切 板状圧痕 内底粘土貼付 指頭痕
835	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	2mm以下の粘物・砂粒	12.3	8.8	3.7	回転系切 板状圧痕 外面指頭痕
836	土師器	环	SD26	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	2mm以下の粘物・砂粒	11.0	9.2	3.5	回転系切 外面指頭痕 反転復元
837	土師器	小皿	SD26	回転ナデ	回転ナデ	にぶい・青 (7.5YR7/4)	にぶい・青 (7.5YR7/4)	1mm以下の粘物・砂粒	7.6	6.0	1.4	回転系切 指頭痕
838	土師器	小皿	SD26	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	ごく微小の粘物・砂粒	8.2	6.3	1.4	回転系切 反転復元
839	土師器	小皿	SD26	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR8/4)	浅黄褐 (10YR8/4)	1mm以下の粘物・砂粒	8.0	7.4	1.4	回転系切 反転復元
840	土製品	土鍤	SD26	-	-	灰白 (10YR8/2)	-	1mm以下の粘物・砂粒	7.3	1.6	-	17.6g
841	土製品	土鍤	SD26	-	-	灰白 (10YR8/2)	-	1mm以下の粘物・砂粒	5.6	1.6	-	12.8g 欠損

第59表 SD26 内出土遺物観察表 土師器・土製品



図版66 SD26 内出土遺物写真 土師器



第100図 SD27 実測図

1号竪穴状遺構 (SY01: 第121・122図・第70表・図版87・88)

D地区東側、フー28区にある。径は南北2.5m、東西2mのやや長方形を呈しており、検出面からの深度は40~50cmである。南北の壁帶部分には各々1か所ずつ柱穴状の落ち込みがあった。

1017、1018は土師器である。1017は坏底片である。底部下端が張り出し、底部は薄い円整状を呈する。1018は小皿でB類中型に分類される。底部から体部にかけて曲線的に立ち上がる。

1019は軽石加工製品である。梢円形を呈する。1020は鉄釘である。両端が尖り合釘と考えられる。

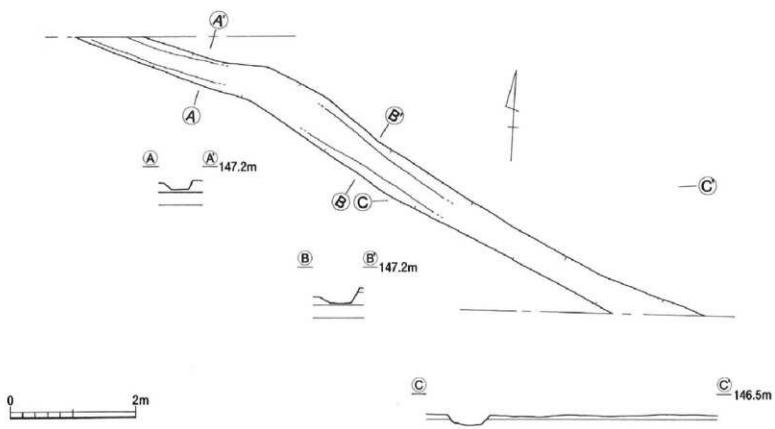
2号竪穴状遺構 (SY02: 第123図)

D地区南東部、ニヌー30区に位置する。SA36と重なり合ったかたちで検出された。北西隅部分は調査区外となっている。径2.2mの正方形を呈する。検出面からの深度は約1mを測る。

柱穴 (Pit: 第124~125図・第71表・図版89~91)

柱穴は多く確認しているが、先に述べたSB以外は建物としての認定に至らなかった。ただ、なかには遺物を多く含むものや陶器等を埋蔵していたものもあった。本遺跡のなかで最も注目すべき出土遺物の一つである、完形の1/2以上ある龍泉窯系青磁蓮弁文碗は、このなかの1つから出土している。また、土師器、特に小皿が多く埋蔵していた柱穴もあった。

1021は龍泉窯系青磁碗の口縁~底部片で、外面に鏽蓮弁文が施されている。釉が青味がかった緑色を呈しており発色良好品である。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1022は龍泉窯系青磁小碗の口縁~底部片である。小碗I-4類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1023は龍泉窯系青磁碗の口縁~体部片で、内面に文様が施されている。碗I-4a類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1024は龍泉窯系青磁杯の口縁~体部片で、外面に鏽蓮弁文が施されている。体部はやや内済して立ち上がり、口縁部は銳利外反し上面が平坦面をなしている。坏III-3か4類またはIV類に相当するものである。1025、1027~1032は龍泉窯系青磁碗の口縁部片、1026は口縁~体部片で、外面に鏽蓮弁文が施されている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1033は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、内面に蓮花文および樹葉文が施されている。碗I-2か3類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1034は龍泉窯系青磁盤の口縁部片である。盤III類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1035は同安窯系青磁碗の口縁部片で、外面に3条の線刻が認められる。碗II類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1036は龍泉窯系青磁杯の口縁部片である。坏III-1a類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1037は青磁碗の口縁部片である。同安窯系碗II類か龍泉窯系碗I類に相当し、12世紀中頃から後半にかけてのものである。1038は龍泉窯系青磁碗の体部片で、内面に文様が施されている。碗I-4類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1039は龍泉窯系青磁碗の体~底部片で、外面に鏽蓮弁文が施されている。また内面見込には幾何学文が施されている。碗II-c類に相当するもので

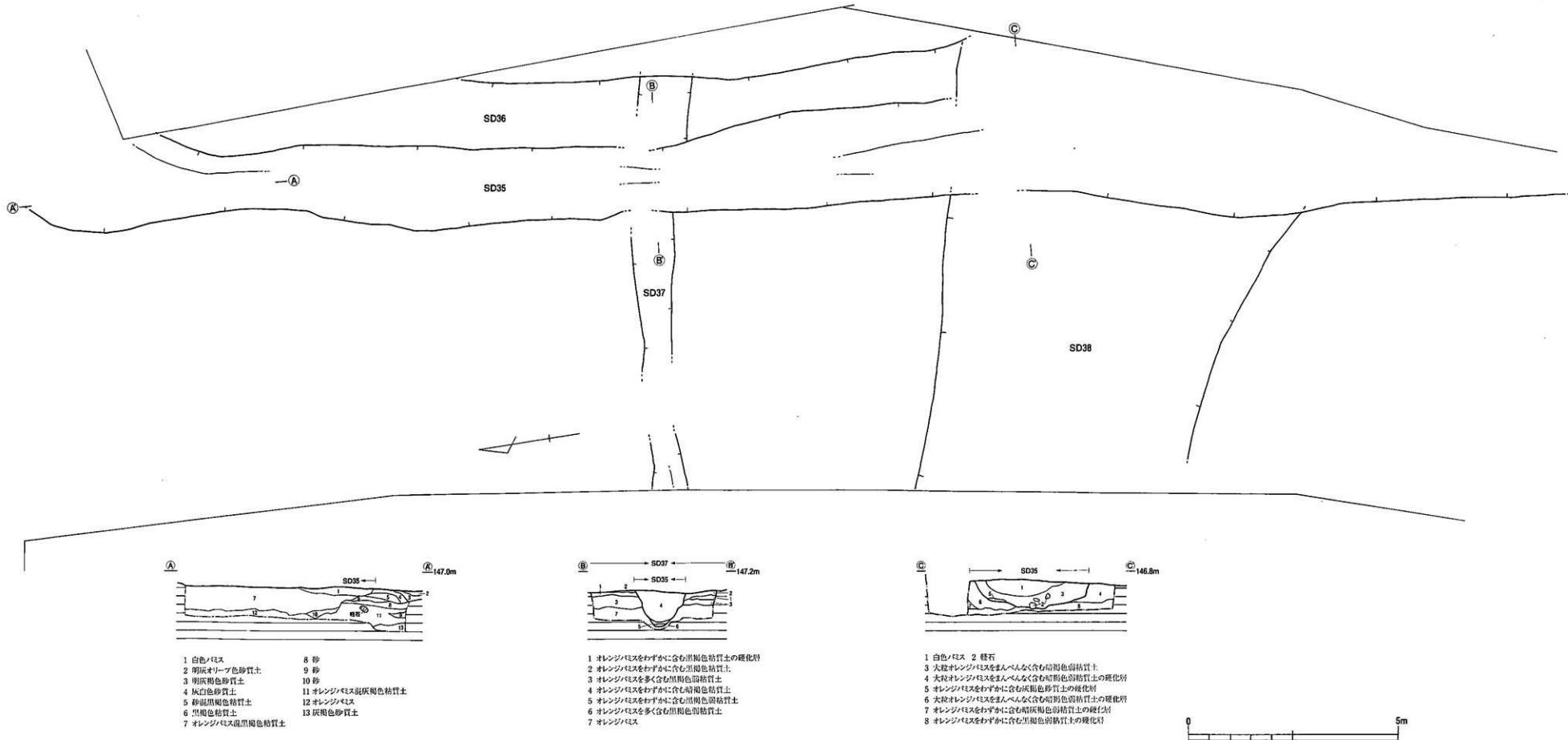


第101図 SD33 実測図



図版67 SD33写真（検出状況）

ある。1040～1042は白磁皿の口縁～底部片、1043は口縁部片で、口縁端部が無釉でいわゆる口禿げである。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1044は白磁碗の口縁部片で、口縁端部が玉縁状を呈しておりいわゆる玉縁口縁である。碗IV類に相当し11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1045は白磁皿の口縁部片で、口縁端部が無釉でいわゆる口禿げである。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1046は白磁四耳壺の底部片である。四耳壺III-3類に相当するもので、13世紀末から14世紀代のものと思われる。1047は白磁四耳壺の体～底部片である。四耳壺III-1類に相当するもので12世紀代のものと思われる。1048は東播系須恵器片口鉢（捏鉢）の口縁部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉が見られる。1049～1052は東播系須恵器鉢の口縁部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。1053は東播系須恵器片口鉢（注口部）で酸化焰によって焼成されている。1054は古



第102図 SD35・36・37・38 実測図



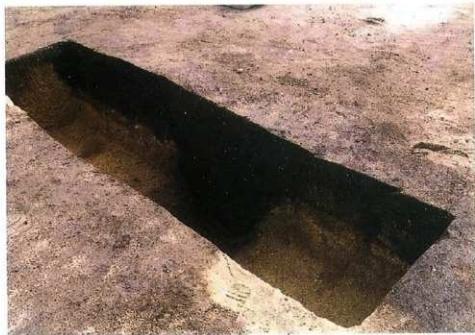
SD35～38 写真（北から）



SD35 断面（南から）



SD37 検出状況（西から）

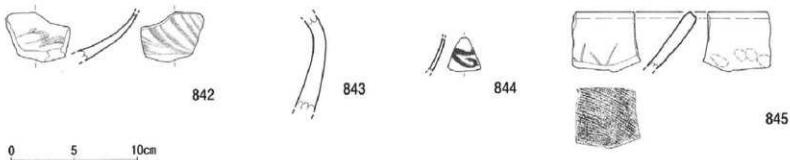


SD35・37（北から）



SD38 幅員確認状況

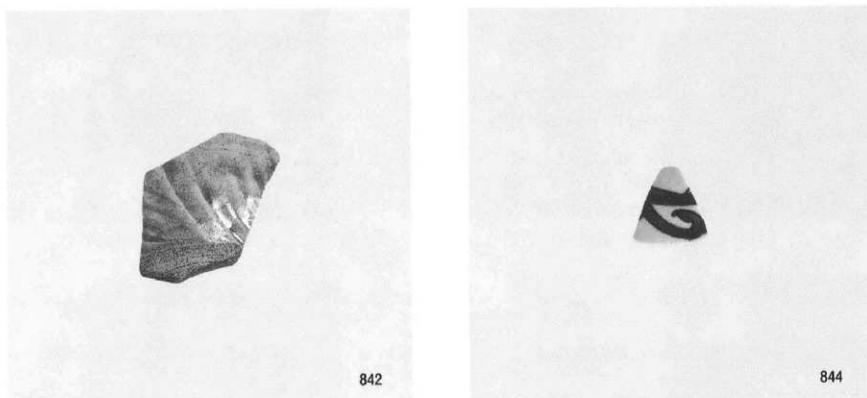
図版68 SD35・36・37・38 写真



第103図 SD35 内出土遺物実測図 陶磁器

掲載番号	種別	器種	出土層遺構	調整(外面)	調整(内面)	胎上	D径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
842	青磁	碗	SD35	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	同安窯系碗皿類
843	白磁	蓋	SD35	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	四耳蓋皿類
844	青花	碗	SD35	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	明時代
845	瓦質土器	擂鉢	SD35	回転ナメ	回転ナメ	に5v+橙色	-	-	-	外面に指痕軋あり

第60表 SD35 内出土遺物観察表 陶磁器

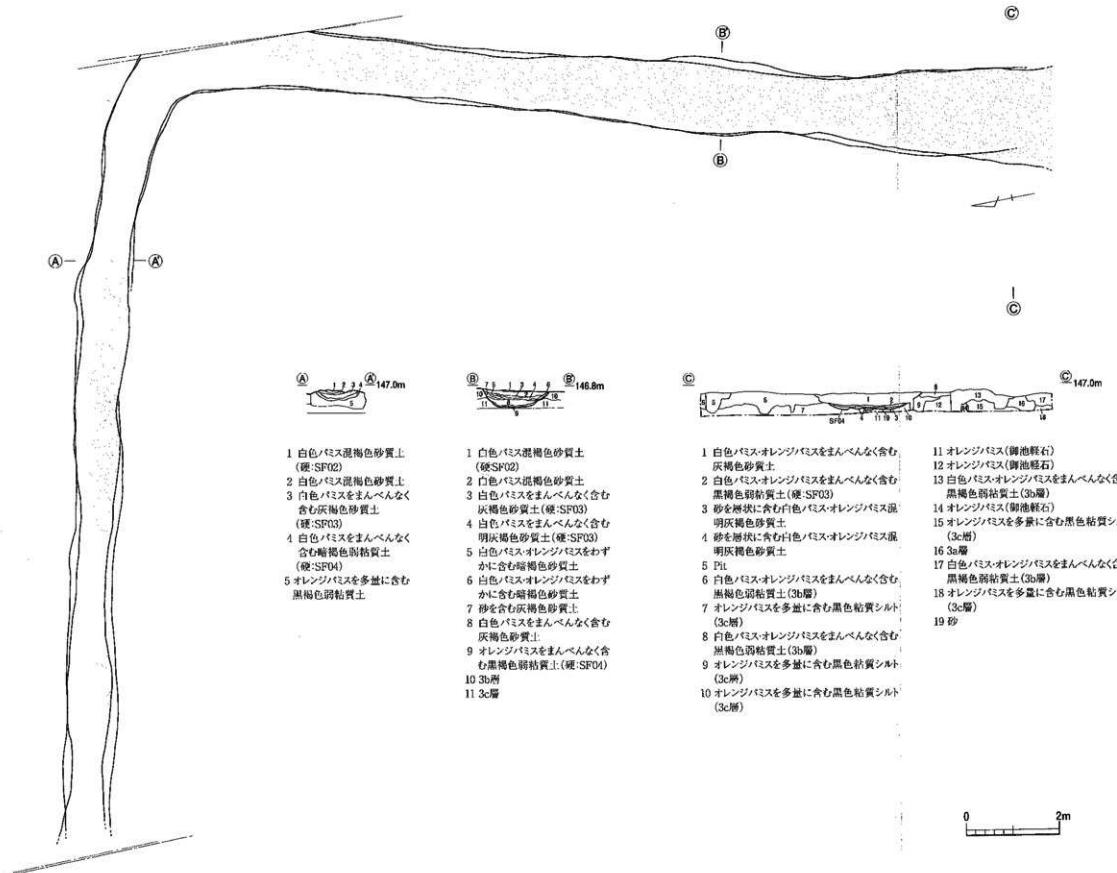


図版69 SD35 内出土遺物写真 陶磁器

瀬戸おろし皿の口縁～体部片で、口唇部が凹んでいる。前IV期以降で13世紀末から14世紀代のものと思われる。

包含層内出土遺物（第126～134図・第72～76表・図版92～95）

1055は龍泉窯系青磁碗の口縁～底部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗II-c類に相当するものである。1056は同安窯系青磁皿の口縁～底部片で、内面に櫛点描文が施されている。皿I-1b類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1057は龍泉窯系青磁碗の口縁～底部片で、外面に鎬蓮弁文が施され、内面見込みには草花文と思われる印刻が認められる。碗II-c類に相当するものである。1058～1066は龍泉窯系青磁碗の口縁～体部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1067は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に片影蓮弁文が施されている。碗II-a類に相当し、13世紀初頭から前半にかけてのものである。1068、1069は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1070は龍泉窯系青磁碗の口



第104図 SF 実測図



SF 全景（南から）



SF（北東から）



SF 断面（南から）



SF 断面（北から）



SF 断面（南から）

図版70 SF 写真



846



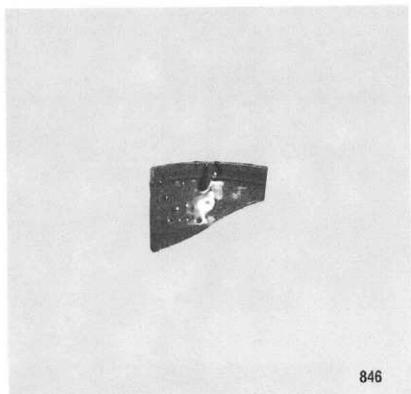
847

0 5 10cm

第105図 SF03・04 内出土遺物実測図 陶磁器

器種番号	種別	器種	出土層構	調整(外面)	調整(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
846	青磁	碗	SF03-04	施釉	施釉	灰白色	17.4	-	-	(反転復元) 阿安窯系碗II類
847	白磁	碗	SF03	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	碗V-2 or VI類

第61表 SF03・04 内出土遺物観察表 陶磁器



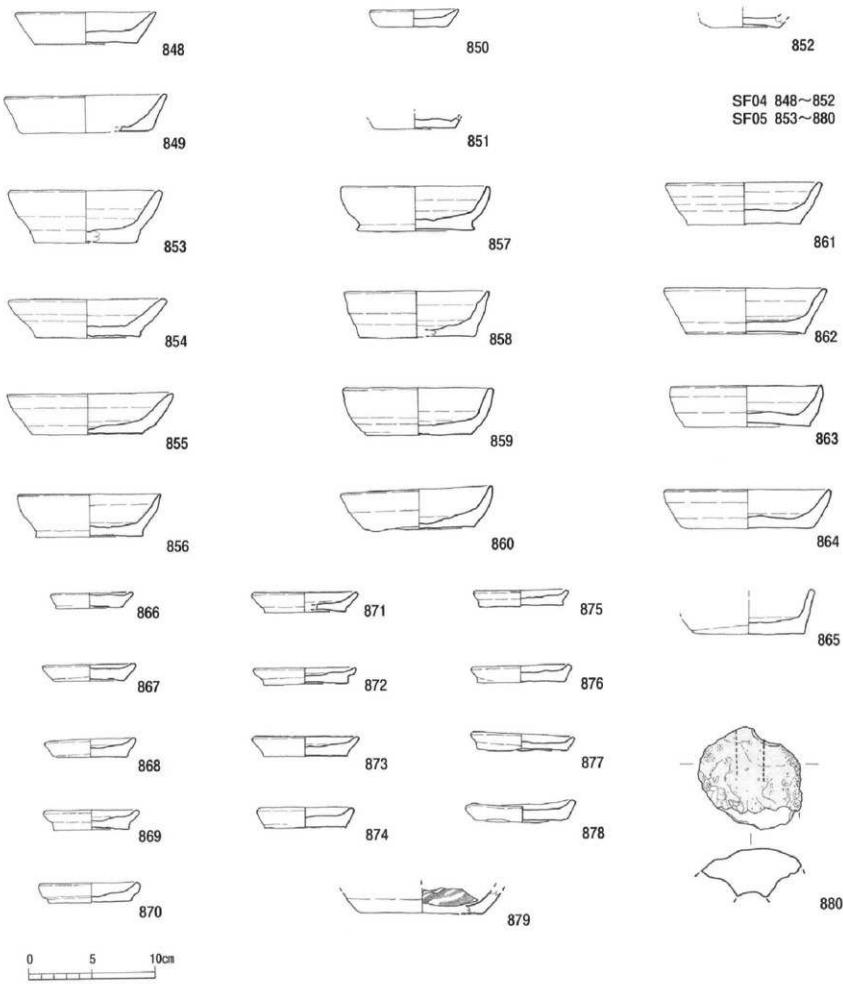
846



847

図版71 SF03・04 内出土遺物写真 陶磁器

縁部片で、外面に篆文が施されており、口縁がやや外反している。碗III-2c類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1071は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1072は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗III-2c類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1073は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に篆文が施されており、口縁がやや外反している。碗III-2c類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1074、1076は龍泉窯系青磁碗の口縁～体部片、1075は口縁部片で、外面に鎬蓮弁文が施されている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1077は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面に櫛目文が施されており、内面には片彫文および櫛目文が施されている。碗I-3類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1078は同安窯系青磁小碗の口縁部片で、外面に縱方向の櫛目文が施されている。碗I-1b類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1079は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、内面に片彫連花文が施されている。碗I-2類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1080は同安窯系青磁碗の口縁～体部片で、外面は無文であり、口縁が外反している。碗II類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1081は龍泉窯系青磁碗の口縁～体部片である。碗I-1類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。釉の発色が悪く焼成不良品である。1082は龍泉窯系青磁碗の口縁～体部片で、内・外面に貫入がみられる。碗IV類以降に相当するもので14世紀後半以降のものである。1083は同安窯系青磁碗の口縁～体部片で、口縁が「く」の字状に外反している。碗IV類に相当し14世紀初頭から後半にかけてのものである。釉が青白色に発色している特異なものである。1084は龍泉窯系青磁碗



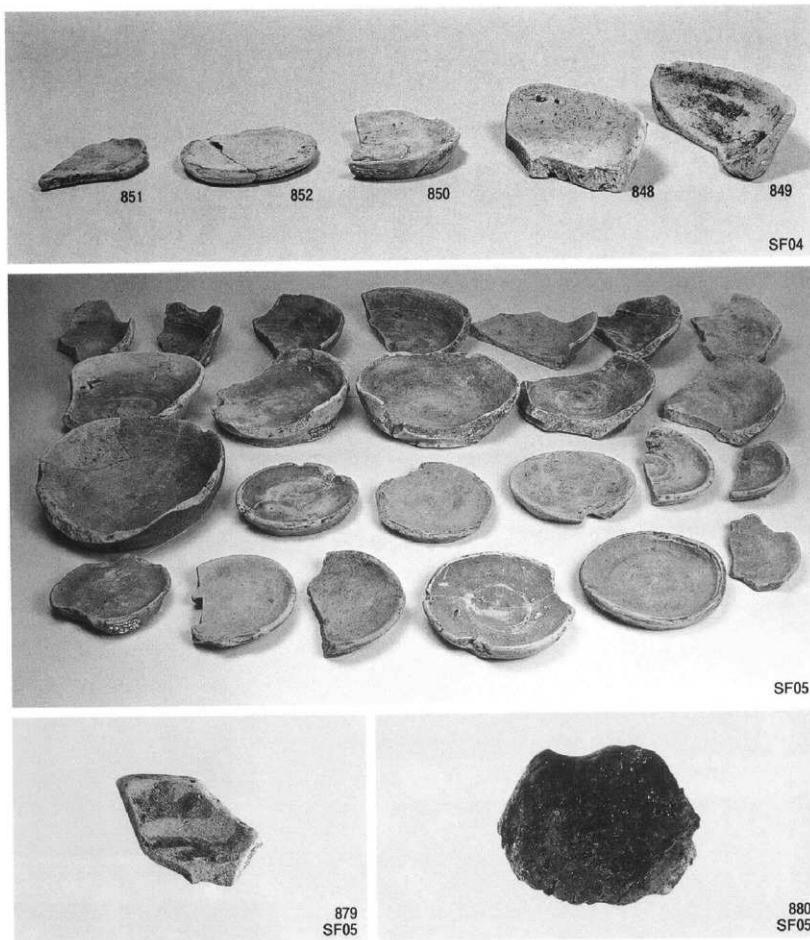
第106図 SF04・05 内出土遺物実測図 土師器・鍛冶関連製品

の口縁部片で、内面に2条の線刻がみられる。碗I-4類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1085**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、内・外面に文様が施されている。碗I-2類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1086**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で内面に文様が施されている。碗I-2類に相当し、12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1087**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に1条、内面に2条の線刻がみられる。碗I-2類が3類に相当し、12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1088**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、内面に1条の線刻がみられる。碗I-1類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1089**は同安窯系青磁碗の口縁部片である。碗II類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。**1090**は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。碗I類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。

器物番号	種別	器種	出土層	調査(外観)	調査(内面)	色調(外観)	色調(内面)	地土	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
848	土師器	环	SP04	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY87E/3)	浅黄緑 (MY87E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	11.1	8.1	2.5	圓軸外切
849	土師器	环	SP04	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白 (MY88E/2)	灰白 (MY88E/2)	3mm以下の粘物・砂粒	12.9	10.1	2.9	圓軸外切 内外側分付着 廉銭
850	土師器	小皿	SP04	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白 (MY88E/2)	灰白 (MY88E/2)	3mm以下の粘物・砂粒	7.1	5.8	1.1	圓軸外切 廉銭
851	土師器	小皿	SP04	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY87E/3)	浅黄緑 (MY87E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	-	6.45	-	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
852	土師器	小皿	SP04	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白 (MY88E/2)	灰白 (MY88E/2)	3mm以下の粘物・砂粒	-	5.8	-	磨耗
853	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (MY88E/4)	浅黄緑 (MY88E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	12.2	8.2	4.15	圓軸外切 外部擦痕 内外側く抜 分付着 反転復元
854	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY87E/3)	浅黄緑 (MY87E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	12.6	8.4	3	圓軸外切 梵銘直 扇形開口
855	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	に伝・青緑 (MY87E/4)	に伝・青緑 (MY87E/4)	3mm以下の粘物・砂粒	13.2	9	3.15	圓軸外切 反転復元
856	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY88E/4)	浅黄緑 (MY88E/4)	3mm以下の粘物・砂粒	11.4	8.5	3.35	圓軸外切 反転復元
857	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (MY87E/5)	浅黄緑 (MY87E/5)	3mm以下の粘物・砂粒	11.9	9.1	3.5	圓軸外切 反転復元
858	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY88E/3)	浅黄緑 (MY88E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	11.6	9.3	3.55	圓軸外切 外一部捺ナ テ指揮痕
859	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白質 (MY88E/3)	灰白質 (MY88E/4)	3mm以下の粘物・砂粒	12	8.5	3.675	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
860	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (MY87E/3)	浅黄緑 (MY87E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	12.1	8.8	3.275	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
861	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	灰白質 (MY88E/4)	灰白質 (MY88E/4)	ごく微小の粘物・砂粒	12.4	9	3.3	圓軸外切 外部擦痕 反転復元
862	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY87E/4)	浅黄緑 (MY87E/4)	3mm以下の粘物・砂粒	12.9	9.5	3.25	圓軸外切 反転復元
863	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	灰白質 (MY87E/2)	灰白質 (MY87E/2)	3mm以下の粘物・砂粒	12	10	3.2	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
864	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY87E/3)	浅黄緑 (MY87E/3)	3mm以下の粘物・砂粒	13.2	10.3	3.1	圓軸外切 反転復元 外部擦痕
865	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (MY88E/4)	浅黄緑 (MY88E/4)	3mm以下の粘物・砂粒	10.4	8	3.6	圓軸外切
866	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	6.6	5.5	1.2	圓軸外切
867	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (7.5YR7/4)	浅黄緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.1	5.7	1.3	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
868	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.2	6	1.3	圓軸外切 指揮痕
869	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.6	6	1.55	圓軸外切 反転復元
870	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.9	6.4	1.5	新軸外切 一部ナデ 内底クロコ 朱色捺料
871	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	8.4	6.4	1.55	圓軸外切 反転復元
872	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	8	6.6	1.25	新軸外切 在底痕 清く内底クロコ 日 反転復元
873	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (7.5YR7/4)	浅黄緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	8.4	6.7	1.25	圓軸外切 指揮痕 内底クロコ 日 内底分付着 反転復元
874	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ→腹ナデ	浅黄緑 (7.5YR7/4)	浅黄緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.6	6.5	1.25	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
875	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	7.6	6.8	1.3	圓軸外切 反転復元
876	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (7.5YR7/6)	浅黄緑 (7.5YR7/6)	3mm以下の粘物・砂粒	7.9	7	1.225	圓軸外切
877	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (7.5YR7/4)	浅黄緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	8.3	7.3	1.3	圓軸外切 梵銘直 灰塗復元
878	土師器	小皿	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	に伝・青緑 (7.5YR7/4)	3mm以下の粘物・砂粒	8.7	7.4	1.25	圓軸外切 一部ナデ
879	土師器	环	SP05	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	3mm以下の粘物・砂粒	-	9.8	-	内底青 朱色捺料
880	鐵物類	剣口	SP05	-	-	-	-	-	-	-	-	先端基部 漆痕

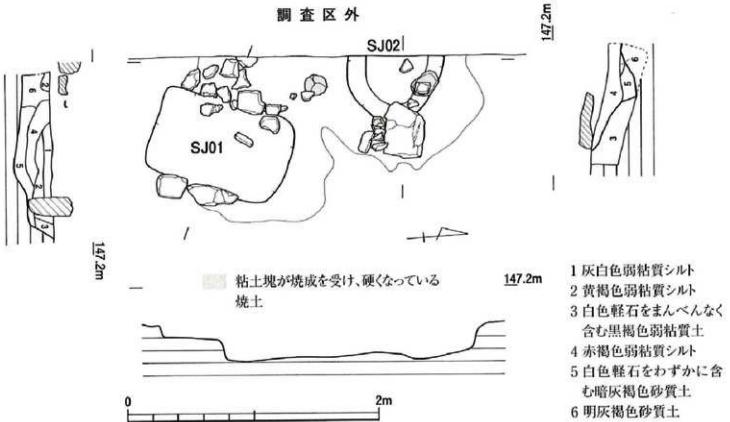
第62表 SF04・05 内出土遺物観察表 土師器・鍛冶関連製品

のである。1091は同安窯系青磁碗の口縁部片で、外面に2条の線刻がみられる。碗II類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1092は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に蓮瓣弁文が施されている。碗III-2 c類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1093は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に鏽文が施されている。碗III-2 c類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1094は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に2条の線刻がみられる。碗II類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1095は龍泉窯系青磁碗の口縁～体部片、1096は口縁部片で、外面に鏽文が施されている。碗III類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1097は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に蓮瓣弁文が施されている。碗III-2 c類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。



図版72 SF04・05内出土遺物写真 土師器・鍛冶関連製品

頭にかけてのものである。1098は龍泉窯系青磁壺の体部片で、外面に鎬運弁文が施されている。口縁端部は内湾していると思われる。曲口碗Ⅱ類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1099は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面は無文であり、内面には草花文が施されている。口縁端部はやや外反している。碗Ⅲ-1 B類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1100は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。碗I-2~4類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1101は龍泉窯系青磁碗の口縁~体部片で、内・外面に貫入がみられる。碗IV類以降に相当し14世紀後半以降のものである。1102、1103は龍泉窯系青磁壺の口縁部片で、外面に鎬運弁文が施されている。壺Ⅲ-4 b類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1104は龍泉窯系青磁壺の口縁部片である。壺Ⅲ-3か4類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1105は龍泉窯系青磁壺の口縁部片で、内・外面ともに無文である。壺Ⅲ類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1106は龍泉窯系青磁小壺の胴部片と思われ、内面に口クロ痕を明瞭にのこしている。IV類以降に相当し14世紀後半以降のものである。1107は龍泉窯系青磁碗の体部



第107図 SJ01・02 実測図



SJ01・02 全景（北東から）



SJ01・02 検出状況



SJ01・02 断面（南から）

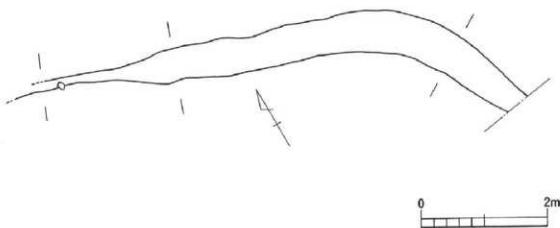


SJ01・02 完掘状況



SJ01・02 断面

図版73 SJ01・02 写真

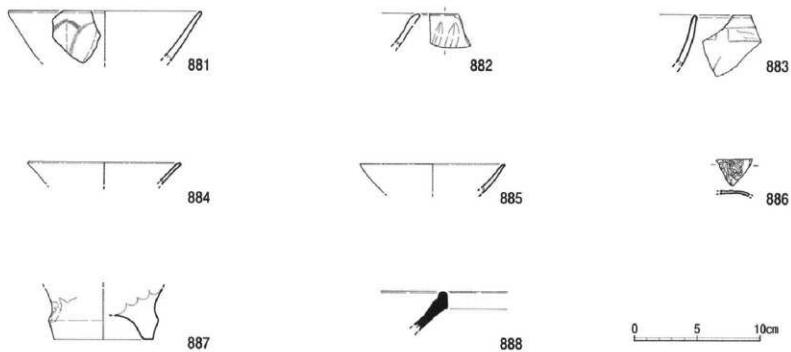


第108図 SS01 実測図



図版74 SS01 写真

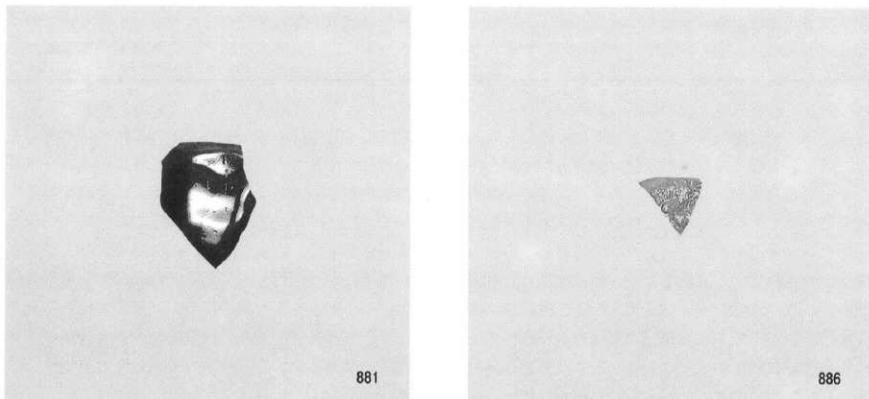
片で、内面に印花文が施されている。碗I-2類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1108は龍泉窯系青磁碗の体～底部片である。碗I-2類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1109は龍泉窯系青磁碗の体～底部片で、外面に籀蓮弁文が施されており、内面見込みには草花文と思われる印刻が認められる。碗II-c類に相当するものである。1110は龍泉窯系青磁碗の体～底部片で、外面に籀蓮弁文が施されており、内面には二次的被熱の痕跡が認められる。また高台内外面に窯具痕をのこしている。碗II-b類に相当し13世紀初頭から前半にかけてのものである。1111は龍泉窯系青磁坏の体～底部片で、疊付けは無釉である。坏III-1類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1112は龍泉窯系青磁碗の体～底部片で、高台内面の一部は無釉であり、外面には二次的被熱の痕跡がみられる。碗I類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1113は龍泉窯系青磁碗の底部片で、疊付けは無釉である。碗III類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1114は同安窯系青磁皿の体～底部片で、内面に草花文および櫛点描文が施されている。皿I-1b類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1115は同安窯系青磁皿の体～底部片で、内面に草花文および櫛点描文が施されている。皿I-1b類に相当し12世紀中頃から後半にかけてのものである。1116は龍泉窯系青磁坏の底部片で、疊付けは無釉である。坏III類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1117は龍泉窯系青磁盤の底部片で、内面に貼付魚文を有している。盤IIIかIV類に相当するものである。1118～1122は白磁皿の口縁～底部片で、口縁端部が無釉でいわゆる口禿げである。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1123は白磁碗の口縁部で、口縁端部



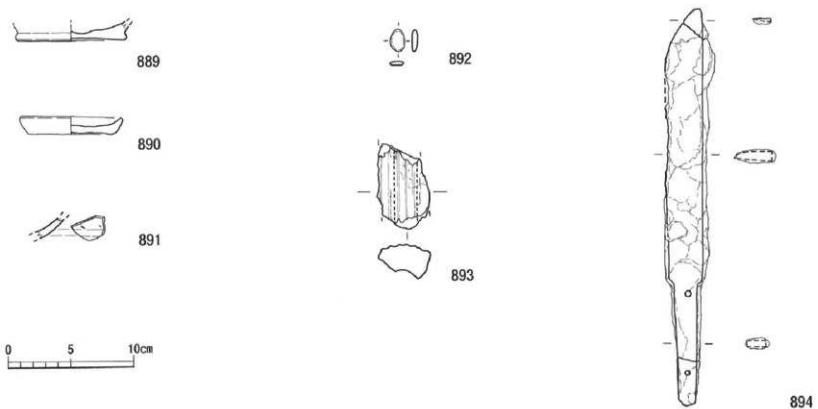
第109図 SS01 内出土遺物実測図 陶磁器

图版番号	種別	器種	出土層構	調整(外面)	溝整(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
881	青磁	碗	SS01	施釉	施釉	灰白色	15.4	—	—	(反転復元) 龍泉窯系碗II-b類
882	青磁	碗	SS01	施釉	施釉	灰白色	—	—	—	龍泉窯系碗III-2c類
883	青磁	碗	SS01	施釉	施釉	灰白色	—	—	—	龍泉窯系碗IV類以降
884	白磁	皿	SS01	施釉	施釉	灰白色	12.2	—	—	(反転復元) 皿IX類
885	白磁	皿	SS01	施釉	施釉	灰白色	11.5	—	—	(反転復元) 皿IX類
886	白磁	合子	SS01	施釉	施釉	灰白色	—	—	—	X類合子 合子の蓋
887	白磁	四耳壺	SS01	施釉	施釉	灰白色	—	7.8	—	(反転復元) 四耳壺III-3類
888	束縛系須恵器	鉢	回転ナマ	回転ナマ	褐色	褐色	—	—	—	

第63表 SS01 内出土遺物観察表 陶磁器



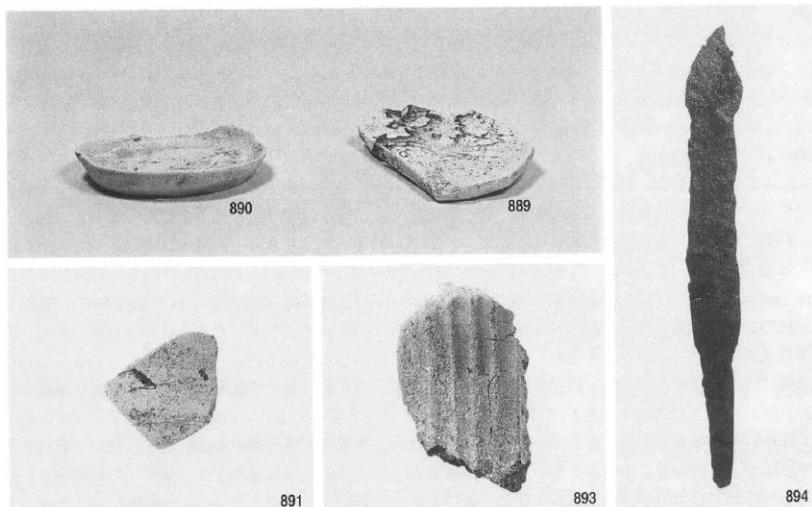
図版75 SS01 内出土遺物写真 陶磁器



第110図 SS01 内出土遺物実測図 土師器・石製品・鍛冶関連製品・鉄製品

相模 番号	種 別	器 種	出土解 釈 構	調 整(外面)	調 整(内面)	色調(外面)	色調(内面)	黏 土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
889	土師器	环	SS01	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の粘物・砂粒	-	8.8	-	内外鉄分付着・磨耗・反転復元
890	土師器	小皿	SS01	回転ナデ	回転ナデ→指ナデ	灰白 (10YR8/1)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の粘物・砂粒	8.2	6.9	1.4	磨耗
891	土師器	环	SS01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐 (10YR7/2)	浅黄褐 (10YR7/2)	1mm以下の粘物・砂粒	-	-	-	墨書き
892	石製品	幕石	SS01	-	-	-	-	-	1.8	1.2	0.4	1.4g
893	鍛冶関連	羽口	SS01	-	-	-	-	2mm以下の粘物・砂粒	-	-	-	
894	鉄製品	短刀	SS01	-	-	-	-	-	31.7	4.0	2.2	237.5g

第64表 SS01 内出土遺物観察表 土師器・石製品・鍛冶関連製品・鉄製品



図版76 SS01 内出土遺物写真 土師器・石製品・鍛冶関連製品・鉄製品

が玉縁状をなしておりいわゆる玉縁口縁であり、外面には釉垂れがみられる。碗IV類に相当し11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1124は白磁碗の口縁～体部片で、口縁端部が無釉でいわゆる口禿げである。碗IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1125～1127は白磁皿の口縁～体部片で、口縁端部が無釉でいわゆる口禿げである。皿IX類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1128は白磁碗の口縁部片で、口縁端部が玉縁状を呈する玉縁口縁である。碗IV類に相当し11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1129は白磁碗の口縁部片で、口縁端部が外反している。碗V類に相当し、11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1130は白磁碗の口縁部片で、口縁端部外面がつまみだされている。碗V～4類または皿類に相当する。1131は白磁皿の口縁部片で、皿皿類に相当する。1132は白磁碗の口縁部片で、碗V類に相当し11世紀後半から12世紀前半のものである。1133は白磁碗の口縁部片で、碗VI～2類に相当する。1134は白磁碗の口縁部片で、皿皿類かV～2類に相当する。1135は白磁皿の体～底部片で底面は無釉である。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1136は白磁皿の体～底部片である。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1137は白磁皿の体～底部片で底面は無釉である。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1138は白磁皿の体～底部片である。碗IX～1類に相当する。1139は白磁碗の体～底部片で、外面は無釉である。碗IV類に相当し11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1140は白磁碗の底部片で、高台は無釉である。碗IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1141は白磁碗の体～底部片で、内面見込みの釉を環状に搔き取っている。碗皿類に相当する。1142は白磁皿の底部片で、底面は無釉である。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1143は白磁皿の底部片で、底面に同心円状の線刻がみられる。皿IX類に相当し13世紀中頃から14世紀初頭にかけてのものである。1144は白磁皿の体～底部片である。皿VI類に相当し11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである。1145は白磁皿の底部片で、底面は無釉である。皿VII類に相当する。1146は青白磁合子（蓋）の天井～口縁部片である。側面に菊花文が施され、上面には菊弁文が施されている。1147は青白磁合子（蓋）の天井～口縁部片である。全体の器形が花形をなしており、上面に文様らしきものが認められる。1148は青白磁合子（蓋）の天井～口縁部片である。口縁端部は無釉であり、型作り成形されたものである。1149は青白磁碗の口縁～体部片で、口縁端部が無釉の口禿げタイプである。1150は青白磁皿の口縁～体部片で、口縁端部は無釉である。12世紀から13世紀にかけてのものである。1151は青白磁皿の口縁部片で、口縁端部は無釉である。1152は青白磁梅瓶の底部片で、高台は無釉であり内面は施釉されている。外面にはなんらかの印刻文がみられる。12世紀後半から13世紀代のものである。1153は青白磁梅瓶の胴部片である。外面に2条1対の櫛描文が施され、内面は無釉でありロクロ調整痕をのこしている。1154は青白磁碗の底部片である。ベタ底で、上面に櫛描文が施されている。12世紀代のものである。1155は青白磁梅瓶の底部片である。外面に環状の印刻文がみられ、高台のみ無釉である。12世紀から13世紀にかけてのものである。1156是中国陶器天目茶碗の口縁部片であり、全体に黒褐釉（天目釉）がかかる。1157是中国陶器盤の口縁部片で、口縁端部内面は無釉である。盤I～2類に相当する。1158是中国陶器天目茶碗の口縁部片で、全体に黒褐釉（天目釉）がかかる。1159是中国陶器蓋の体部片で、外面にロクロ痕をのこしている。11世紀後半から13世紀とみられる。1160、1161是中国陶器盤の底部片である。底面は無釉で、内面は施釉されている。盤I～2類に相当する。1162は東播系須恵器鉢の口縁～体部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。1163は東播系須恵器壺の口縁～体部片で、口唇部が銳利に尖っている。1164～1166は東播系須恵器鉢の口縁～体部片、1167は口縁部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。1168は東播系須恵器鉢の口縁～体部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。14世紀前半のものである。1169、1170は東播系須恵器鉢の口縁～体部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。1171は東播系須恵器壺の口縁部で、外面の一部に平行タキの痕跡をのこしている。13世紀頃と思われる。1172は東播系須恵器鉢の口縁～体部片、1173、1174は口縁部片で、口唇部外面に重ね焼きの痕跡である自然釉がみられる。1175は瓦質土器火鉢の口縁部片である。内面の一部が欠損しており、外面に菊の印花文が施されている。全体の器形は輪花形をなしていたと考える。1176は畿内系瓦質土器土鍋の脚部である。1177は瓦質土器火鉢の底部片で、外面が著しく摩耗している。1178は灰釉陶器入子の口縁～底部片で、底部に回転糸切り後ヘラナデ調整痕をのこしている。内・外面上位の一部にススの付着がみられることから、灯明皿として使用されていたものと考える。全体のプロポーションは輪花（8枚）の器形をなしていたと推察する。1179、1180は灰釉



第111図 SS02 実測図



SS02 全景 (北西から)

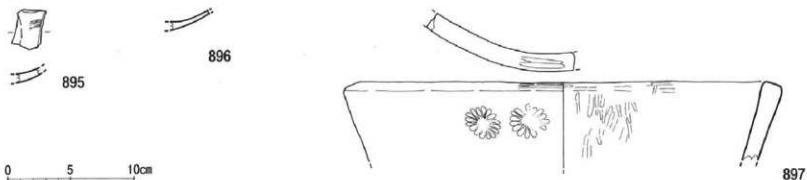


SS02 全景 (東から)



SS02 検出状況 (東から)

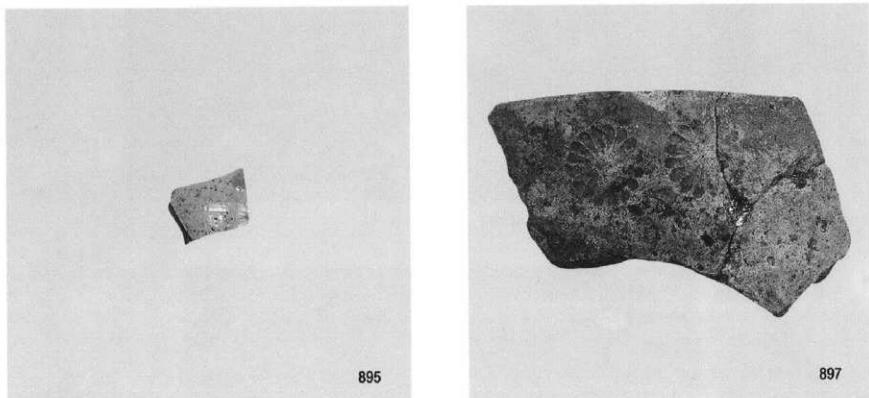
図版77 SS02 写真



第112図 SS02 内出土遺物実測図 陶磁器

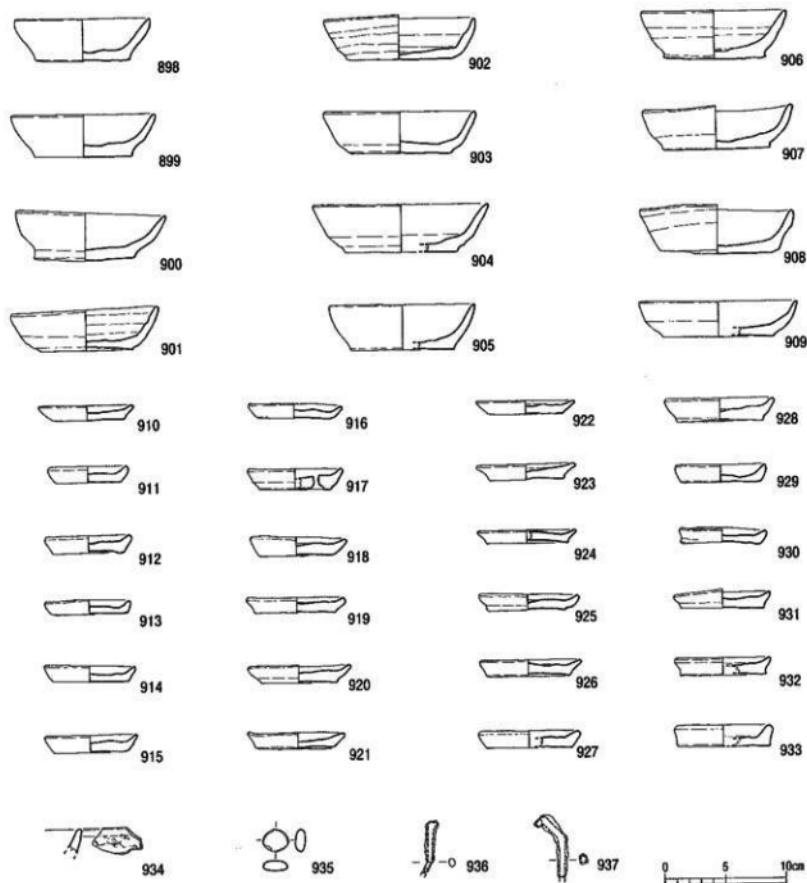
出蔵番号	種別	器種	出土層構	調整(外面)	調整(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
895	白磁	碗	SS02	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	碗V~蝶類
896	白磁	碗	SS02	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	碗V~蝶類
897	瓦質土器	火鉢	SS02	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	34.8	-	-	(反転復元) 外面の摩耗著しい

第65表 SS02 内出土遺物観察表 陶磁器



図版78 SS02 内出土遺物写真 陶磁器

陶器平碗の口縁部片である。1181は灰釉陶器碗の体～底部片で、内面に赤色顔料の付着がみられる。1182は灰釉陶器入子の体～底部片で、外面下部に指ナデによる調整痕をのこしている。1183は灰釉陶器小碗か入子の底部片である。1184は常滑片口鉢の口縁部片（注口部）である。13世紀後半の産である。1185は常滑壺の口縁部片である。13世紀後半の産である。1186は常滑壺の肩部片である。部分的破片のため年代不明である。1187は常滑壺の肩部片で、外面に「北」（もしくは『の』？）の線刻がみられる。13世紀後半から14世紀初頭のものである。1188は常滑壺の底部片である。部分的破片のため年代不明である。1189は備前壺の口縁～頸部片である。Ⅱ期に相当し13世紀後半にあたるものである。1190は備前大甕の口縁～肩部片で、頸部に指頭圧痕が残存しており輪積成形後指オサエによって調整が行なわれたと推察する。13世紀代とみられる。1191は備前擂鉢の口縁部片で、口縁端部外面がやや凹んでいる。Ⅲ期に相当し14世紀前半のものである。1192、1193は備前甕の口縁部片で、口縁端部がややたれている。Ⅲ期に相当し14世紀前半のものである。1194は備前擂鉢の体部片で、外面中央が突出した断面形態をなしており、内面に3条1単位の櫛目がみられる。部分的破片のため年代



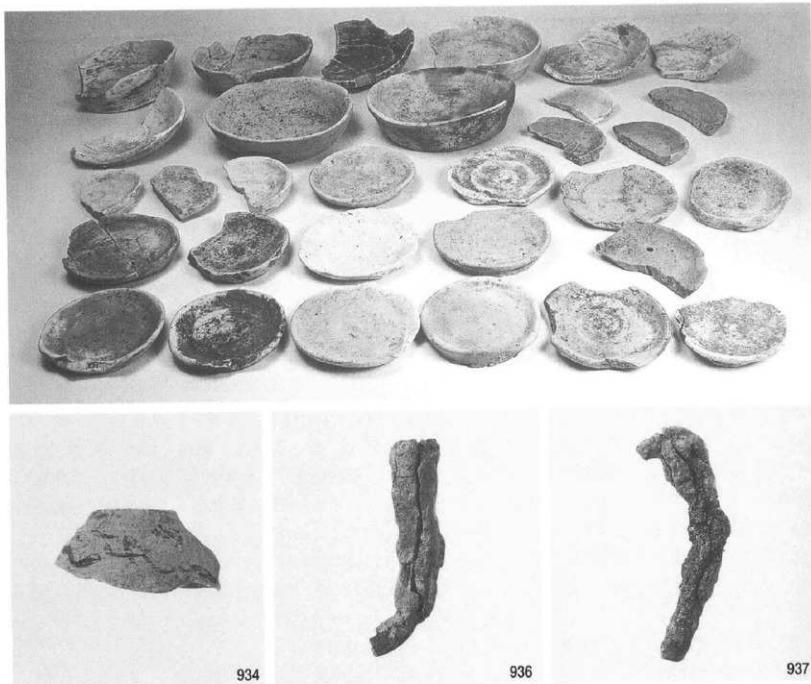
第113図 SS02 内出土遺物実測図 土器・石製品・鉄製品

不明である。1195は備前鉢の体～底部片で、内面に5条1単位の横目がみられる。1196は備前壺か壺の底部片で、底面の一部が火ぶくれをおこしている。1197は備前壺か壺の底部片である。1198は国産陶器の口縁～底部片で、内面に灰釉の部分的残存がみられる。全体の器形は輪花（8枚）をなしていたものと考える。瀬戸・美濃系ではないかと思われる。1199は国産陶器の体～底部片である。内面に灰釉の部分的残存がみられ、底面には回転糸切り後の板状圧痕および胎土目をのこしている。瀬戸・美濃系ではないかと思われる。1200は国産陶器の体～底部片である。内面および体部外面上位に灰釉を施釉しており、底面には回転糸切りの痕跡を明瞭にのこしている。瀬戸・美濃系ではないかと思われる。

1201は黒色土器底部片である。高台を欠損する。高台内に墨書きを行う。仮名書きで「その」と判読される。1202は土器小皿でA類大型に分類される。底部下端が若干張り出し、底部から体部にかけて外反しながら大きく開く。内外面に墨書きを行う。判読不明である。1203は土器小皿でB類中型に分類される。底部下端が若

深さ cm	種 別	器 特	出土品 名	調 査(外観)	調 査(内観)	色調(外観)	色調(内観)	附 上	口径 (cm)	底径 (cm)	高 度 (cm)	備 考
898	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	3mm以下の底物・砂粒	11.2	7.8	3.5	圓軸系別 指捺底面 内外赤く鉄分有 内外赤く鉄分有 指捺
899	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	2mm以下の底物・砂粒	11.8	8.0	3.5	圓軸系別 外 黄指捺ナメ 内外赤く鉄分有 指捺
900	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	3mm以下の底物・砂粒	12.2	8.3	3.9	圓軸系別 内外赤く鉄分有 反転復元
901	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	2mm以下の底物・砂粒	12.2	7.5	3.3	圓軸系別 線状所取 青く鉄分有
902	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	灰 (7.5YR5/6)	灰 (7.5YR5/6)	3mm以下の底物・砂粒	12.6	8.5	3.6	圓軸系別 板状指捺 灰指捺
903	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰 (7.5YR5/6)	灰 (7.5YR5/6)	1mm以下の底物・砂粒	12.0	8.4	3.8	圓軸系別 内外赤化物・鉄分有 指捺 反転復元
904	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	12.7	8.6	3.1	圓軸系別 指捺底 青指捺
905	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	ごく微小の底物・砂粒	14.4	9.2	3.9	圓軸系別 内外赤化物・鉄分有 反転復元
906	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	12.0	8.4	4.0	圓軸系別 内外赤分有 反転復元
907	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/6)	浅黄褐色 (7.5YR5/6)	4mm以下の底物・砂粒	12.5	8.8	3.4	圓軸系別 外部指捺ナメ 内外薄く鉄分有
908	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	12.6	9.8	3.8	圓軸系別 板状指捺 内外薄く鉄分有
909	土師器	环	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	13.0	9.2	2.9	圓軸系別 反転復元
910	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	7.7	5.5	1.2	圓軸系別 青く鉄化物有 反転復元
911	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	6.7	5.4	1.3	圓軸系別 指捺底 反転復元
912	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	7.2	5.8	1.4	圓軸系別 内外赤分有 指捺 反転復元
913	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	7.1	6.0	1.1	圓軸系別 指捺底 内外赤分有
914	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	3mm以下の底物・砂粒	7.5	6.2	1.3	圓軸系別 内底リクロ目 内外薄く鉄化物有
915	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	7.6	6.2	1.5	圓軸系別 内外薄く鉄分有 亂
916	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	浅黄褐色 (7.5YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	7.8	6.3	1.2	圓軸系別 指捺底 破片
917	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	7.9	6.0	1.7	圓軸系別 底部摩耗 反転復元
918	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	7.9	6.1	1.4	圓軸系別 指捺底 内底リクロ目 内外薄く鉄化物有
919	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	7.9	6.5	1.2	圓軸系別 指捺底 内底リクロ目 亂
920	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/6)	浅黄褐色 (7.5YR5/6)	ごく微小の底物・砂粒	8.5	6.3	1.4	圓軸系別 指捺底 内底リクロ目 内外薄く鉄分有
921	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	3mm以下の底物・砂粒	8.0	5.5	1.4	圓軸系別 廉耗
922	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	8.2	5.2	1.1	圓軸系別 指捺底 内外薄く鉄分有
923	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	8.2	5.2	1.3	圓軸系別 指捺底 内底リクロ目 内外薄く鉄分有
924	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	8.0	6.6	0.9	圓軸系別 反転復元
925	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	8.2	6.5	1.3	圓軸系別 内外薄く鉄分有
926	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	8.4	7.0	1.3	圓軸系別 指捺底 内外薄く鉄分有
927	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	8.4	7.0	1.5	圓軸系別 指捺底 反転復元
928	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	浅黄褐色 (7.5YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	9.0	7.2	1.9	圓軸系別 指捺底 内外薄く鉄分有
929	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	ごく微小の底物・砂粒	7.5	6.4	1.5	圓軸系別 反転復元
930	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ→指ナメ	灰 (7.5YR2/6)	灰 (7.5YR2/6)	1mm以下の底物・砂粒	7.3	6.5	1.3	圓軸系別 指捺底
931	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	1mm以下の底物・砂粒	8.0	6.9	1.3	圓軸系別 内指捺直
932	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	灰白 (7.5YR2/4)	灰白 (7.5YR2/4)	1mm以下の底物・砂粒	8.0	7.2	1.4	圓軸系別 反転復元
933	土師器	小皿	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/3)	浅黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の底物・砂粒	8.2	7.7	1.8	圓軸系別 内外赤分有 反転復元
934	土師器	耳	SS02	圓軸ナメ	圓軸ナメ	浅黄褐色 (10YR5/4)	浅黄褐色 (10YR5/4)	1mm以下の底物・砂粒	-	-	-	縦槽
935	石製品	基石	SS02	-	-	-	-	-	2.1	1.9	0.7	44g
936	铁製品	耳	SS02	-	-	-	-	-	4.4	0.7	0.5	49g 先端欠損
937	铁製品	耳	SS02	-	-	-	-	-	6.0	0.6	0.5	43g 先端欠損

第66表 SS02 内出土遺物観察表 土師器・石製品・鉄製品



図版79 SS02 内出土遺物写真 土器・石製品・鉄製品

干張り出し、底部から体部にかけて外反気味に立ち上がる。内外面に墨書きを行う。判読不明である。1204は土師器小皿でA類大型に分類される。底部から体部にかけて段差が形成され、体部は直線的に立ち上がる。底部に2本の穿孔を行う。1205は土師器小皿でC類大型に分類される。底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。底部内面に未貫通の穿孔が残る。1206は坏口縁部かと考えられる。穿孔を行う。1207は片面に粗、植物織維の圧痕が残る土器片である。1208は坏底部で回転ヘラ切離しである。内面には十字様のスタンプ痕が残る。1209はミニチュア土器の羽釜である。

1210～1214は滑石製石鍋である。1210～1214は口縁部片である。断面台形を呈する鍔を削りだす。1212は鍔の高さがやや低く、先端に向けて下がり気味である。また口縁部外面は鍔よりやや斜めに立ち上がる。外面に炭化物の付着が見られる。1215～1218は滑石製石鍋軸用品である。1215は体部～底部片である。体部がカーブを描き膨らむ部分を削り、平坦な板状に調整している。1216は体部片である。穿孔を行う。破断面の一部にのみ調整を施す。1217は部位不明である。長軸に沿って2方向から穿孔を行うが貫通していない。1218は部位不明である。穿孔を行う。内部に擦痕の見られる一条の溝が見られ、砥石としての使用が考えられる。1219は硯である。裏面の一部に擦痕が残る。1220は砥石である。

1221は鉄鍋口縁部と考えられる。鍛造とされる。1222、1223は平瓦である。凹面に布目痕が認められる。

これまで、鶴喰遺跡の中世遺構群について出土遺物とともに報告してきた。ここでは、出土遺物の傾向や遺構群の位置付けなどを整理し、まとめとしたい。

1 中世遺構群の時期的な位置付けについて

(1) 出土陶磁器からみた時期的変遷・様相

－中国陶磁を中心とした陶磁器の出土傾向から－

今回の調査で本遺跡からは、種別・器種とともに多種多様な国産陶器約630点、舶載陶磁器（西方系、南方系、中国産含む）約830点、計約1460点の陶磁器が出土したが、いずれも小破片・細破片・部分的破片であった。そのなかで、器形・法量が復元できるもの、小破片・細破片もしくは部分的破片であっても「特徴・特殊性のあるもの」・「年代の基準になり得るもの」等を考慮にいれ抽出し、国産陶器100点・中国陶磁器210点、計310点を掲載した。

その内訳を器種別に概述すると、碗・入子・杯・皿・梅瓶・盤などの【食膳具】が約200点、甕・壺などの【貯蔵具】が約30点、火鉢・火舎などの【日用具】が約5点、鉢・片口鉢・擂鉢・おろし皿などの【調理具】が約60点、【煮炊具】の鍋が2点、天目茶碗（中国産）・青白磁合子（中国産）・白磁合子（中国産）などの【特殊品】が7点である。ただし、器種の判別不能品があるため、数量は概数とし、終点数は掲載点数と必ずしも一致しないことをことわっておく。

年代の標識となる中国陶磁（掲載分）を時系列的面からみた出土傾向は以下のとおりである。%は掲載点数全体からみた割合を示す。なお分類・編年は「太宰府上器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年（2000.2補訂）」に依った。

- ① 11世紀後半～12世紀前半に最盛期をむかえるC期 合計8点（約4.0%）
 - 白磁碗II類1点（約0.5%）・白磁碗IV類4点（約2.0%）・白磁碗V類2点（約1.0%）
 - 白磁III類1点（約0.5%）
- ② 12世紀中頃～12世紀後半に最盛期をむかえるD期 合計37点（約18.0%）
 - 同安窯系青磁碗I類2点（約1.0%）・同安窯系青磁碗II類6点（約3.0%）
 - 同安窯系青磁碗III類1点（約0.5%）・同安窯系青磁皿I類4点（約2.0%）
 - 龍泉窯系青磁碗I類24点（約11.5%）
- ③ 13世紀初頭～13世紀前半に最盛期をむかえるE期 合計44点（約21.0%）
 - 龍泉窯系青磁碗II類43点（約20.5%）・龍泉窯系青磁曲口碗II類1点（約0.5%）
- ④ 13世紀中頃～14世紀初頭にかけて最盛期をむかえるF期 合計59点（約28.0%）
 - 龍泉窯系青磁III類23点（約11.0%）
 - 龍泉窯系青磁III類とセット関係にある白磁IX類36点（約17.0%）
- ⑤ 14世紀初頭～14世紀後半にかけて最盛期をむかえるG期 合計1点（約0.5%）
 - 同安窯系青磁碗IV類1点（約0.5%）

上記のデータから、鶴喰遺跡は古代末頃（12世紀前半）に出現し、3回（②・③・④）の時期的変遷を経て、14世紀中頃には衰退し、14世紀後半から15世紀にかけて、消滅したものと推察される。また本遺跡の全盛期が、13世紀後半～14世紀初頭頃であったことが窺える。

次に器種別に概述した遺物の内、特徴・特殊性をもつ物について詳述したい。473・816・1350・1351・1353は中国産青白磁梅瓶であるが、梅瓶は人參酒などの高級酒の容器とされている。542・1344・1345・1346は中



第114図 SS03 実測図



SS03 全景（北東から）



SS03 全景（北東から）

図版80 SS03 写真



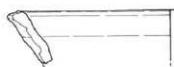
938



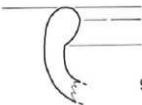
939



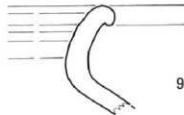
940



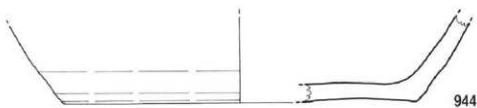
941



942



943



944

0 5 10cm

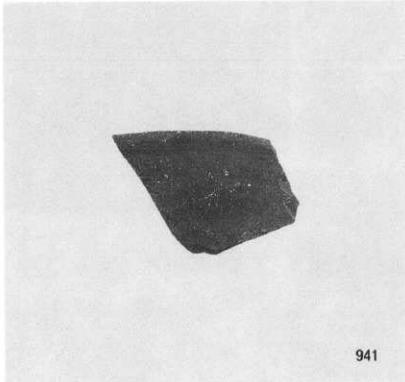
第115図 SS03 内出土遺物実測図 陶磁器

掲載番号	種別	器種	出土層 遺構	調整(外面)	調整(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
938	白磁	碗	SS03	施釉	施釉	灰白色	-	-	-	碗底頸
939	車轍系須恵器	鉢	SS03	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	-	-	-	
940	車轍系須恵器	鉢	SS03	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	-	-	-	
941	常滑	片口鉢	SS03	回転ナデ	自然釉	褐灰色	25.8	-	-	(反転復元) 6期
942	備前	甕	SS03	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	-	-	-	
943	備前	甕	SS03	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	-	-	-	
944	備前	甕	SS03	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	-	28.3	-	(反転復元)

第67表 SS03 内出土遺物観察表 陶磁器

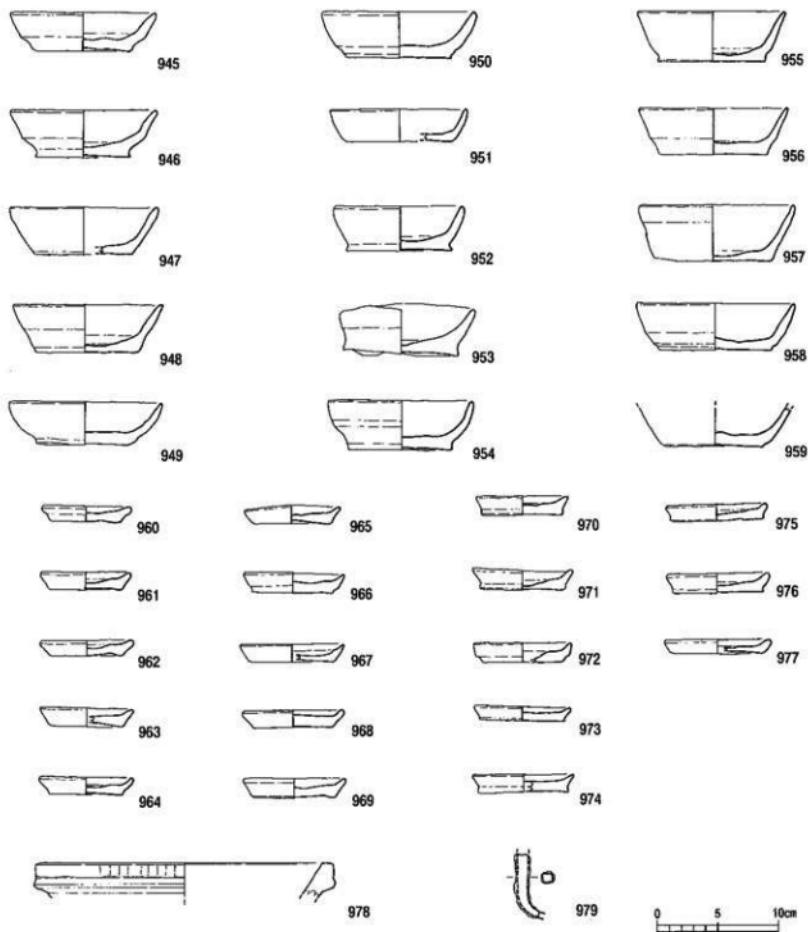


938



941

図版81 SS03 内出土遺物写真 陶磁器



第116図 SS03 内出土遺物実測図 土師器・石製品・鉄製品

国産青白磁合子であるが、合子は貴重品収納容器としての用途が多くみられ、墓壙からの出土事例も報告されており、その場合、葬送儀式との関連性が考えられる。また1354・1356の中国産天目茶碗、887・1067・1068の中国産白磁四耳壺は、上述の青白磁梅瓶・青白磁合子とともに中世前期の高級陶磁器であった。鎌倉市『今小路西遺跡』からは、上質の各種青磁（13～14世紀）とともに、これらの高級陶磁器が出土および採集されている。『今小路西遺跡』の大型武家屋敷は、北条得宗家に近い者の屋敷と推定されている。1374は、瓦質土器鍋で、三本の足（脚）が貼り付けられたいわゆる足（脚）鍋であり、畿内系と推定される。6・844は、中国産青花碗である。青花磁器は、室町時代（15世紀前半）には日本にも運ばれ「染め付け」の名で一部に珍重されており、『室町殿行幸御録記』永享9年（1437）のなかにも「染め付け」の名が記載されている。

以上、簡略ながら中国陶磁から本遺跡の消長をうかがってみた。12世紀後半あたりから次第に陶磁の量が増

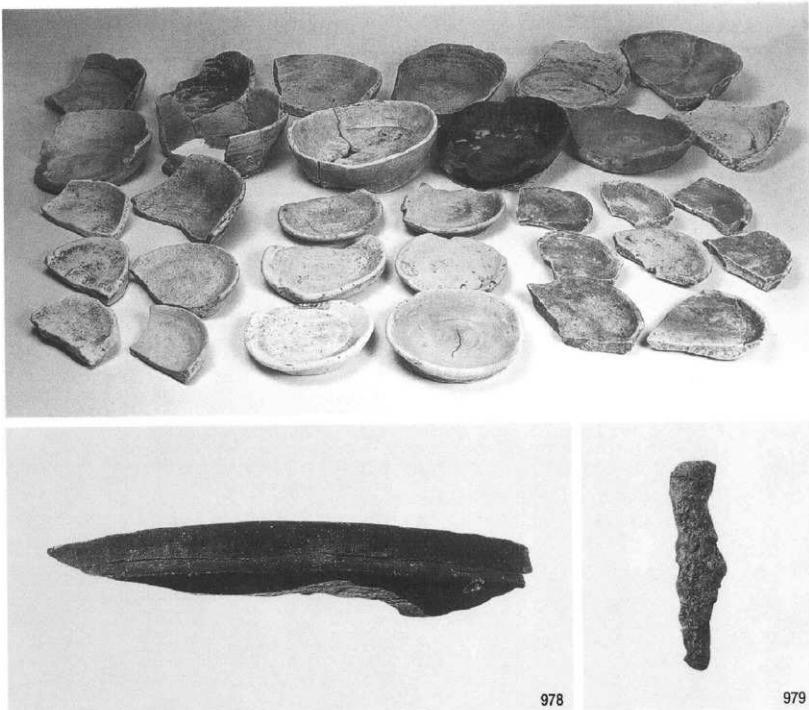
出典番号	種別	寸法	出土場所	調査(外観)	測量(内面)	色調(外観)	色調(内面)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
945	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.2	8.0	3.2	圓板各切 ナメ 内底ロクロ目 反転復元
946	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.3	7.9	3.9	圓板各切 反転復元
947	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.4	8.1	3.9	圓板各切 外工具痕 反転復元
948	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・アーナ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	3mm以下の粘土・砂粒	12.4	8.5	3.9	圓板各切 拾工具痕 内底丸上貼付 内外底各貼分付着 反転復元
949	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	3mm以下の粘土・砂粒	12.7	8.0	3.5	圓板各切 板状灰瓦 内外底分付着 反転復元
950	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.9	8.9	3.8	圓板各切 板状灰瓦 反転復元
951	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	11.6	9.1	2.7	外側圓面 磨擦 混合復元
952	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	3mm以下の粘土・砂粒	11.0	8.8	3.4	圓板各切 檻板瓦痕 外一部削り 反転復元
953	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	ごく微小の粘土・砂粒	11.4	9.7	4.0	圓板各切 板状灰瓦 外側圓面
954	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	にごく少粘土	12.2	8.8	4.1	圓板各切 外側圓面 反転復元
955	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.2	8.9	4.1	圓板各切 檻板瓦痕 内底磨擦土貼付 内外底磨物付着
956	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・アーナ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.4	9.0	3.8	圓板各切 外側圓面 内底ロクロ目
957	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	にごく少粘土 (10YR5/3)	にごく少粘土 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	13.0	9.8	4.5	圓板各切 内底磨物付着
958	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	3mm以下の粘土・砂粒	13.1	9.4	3.8	圓板各切 板状灰瓦 底
959	土師器	环	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	12.2	8.7	-	圓板各切 外底磨痕 内底ロクロ目 外舟形付着
960	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	3mm以下の粘土・砂粒	7.4	5.9	1.3	圓板各切 内外薄く底付分着 磨耗
961	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	灰 (7.5YR5/6)	灰 (7.5YR5/6)	3mm以下の粘土・砂粒	7.5	6.1	1.5	圓板各切 内外薄く底付分着 反転復元
962	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	7.7	5.9	1.3	圓板各切 指痕痕 内外薄く底付分着
963	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	7.8	6.0	1.5	指痕 内外薄く底付分着 反転復元
964	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	灰青色 (10YR5/2)	灰青色 (10YR5/2)	3mm以下の粘土・砂粒	7.8	6.0	1.4	圓板各切
965	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	3mm以下の粘土・砂粒	7.9	6.6	1.3	薄く内底ロクロ目 磨耗
966	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	8.2	6.6	1.5	圓板各切 指痕痕
967	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/1)	淡青色 (10YR5/1)	ごく微小の粘土・砂粒	8.6	7.0	1.5	圓板各切 指痕痕 内底ロクロ目
968	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	灰青色 (10YR5/3)	灰青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	8.4	6.6	1.4	外括縫痕 内外底分付着 磨耗
969	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	8.5	6.6	1.6	圓板各切 反転復元
970	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白 (7.5YR5/6)	灰白 (7.5YR5/6)	3mm以下の粘土・砂粒	7.6	6.8	1.6	内外底分付着 反転復元
971	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/4)	淡青色 (10YR5/4)	ごく微小の粘土・砂粒	8.2	7.0	1.7	圓板各切 内底ロクロ目
972	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白 (10YR5/2)	灰白 (10YR5/2)	3mm以下の粘土・砂粒	8.0	6.6	1.5	圓板各切 檻板瓦痕 反転復元
973	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	8.0	7.1	1.2	圓板各切 檻板瓦痕 反転復元
974	土師器	小皿	SS03	圓板各切	圓板ナメ・沿ナメ	灰青色 (10YR5/4)	灰青色 (10YR5/4)	3mm以下の粘土・砂粒	8.4	7.6	1.5	圓板各切 ナメ 反転復元
975	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ・沿ナメ	灰青色 (10YR5/2)	灰青色 (10YR5/2)	3mm以下の粘土・砂粒	8.4	7.7	1.4	圓板各切 檻板瓦痕 反転復元
976	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	淡青色 (10YR5/3)	淡青色 (10YR5/3)	3mm以下の粘土・砂粒	8.5	7.6	1.6	圓板各切 保証痕痕
977	土師器	小皿	SS03	圓板ナメ	圓板ナメ	にごく薄 (10YR5/4)	にごく薄 (10YR5/4)	ごく微小の粘土・砂粒	8.9	7.8	1.2	圓板各切 内底ロクロ目 外底分付着 反転復元
978	石製品	石盤	SS03	-	-	-	-	-	-	-	-	反転復元
979	鉄製品	剪	SS03	-	-	-	-	-	-	-	3.3	0.9 0.7 11g 周邊欠損

第68表 SS03 内出土遺物観察表 土師器・石製品・鉄製品

し、14世紀初頭頃を最盛期とみることができる。また器種構成の検討からは、上級のものも本遺跡に外來していること確認することができた。

(2) 土師器について

土師器の様相については、付編にあるように、12世紀後半～14世紀中頃を対象時期とし、特に13世紀後半～14世紀中頃が盛行期であると概括した。「時系列に沿った詳細な形態変化を捉えるまでには至らず、また共伴



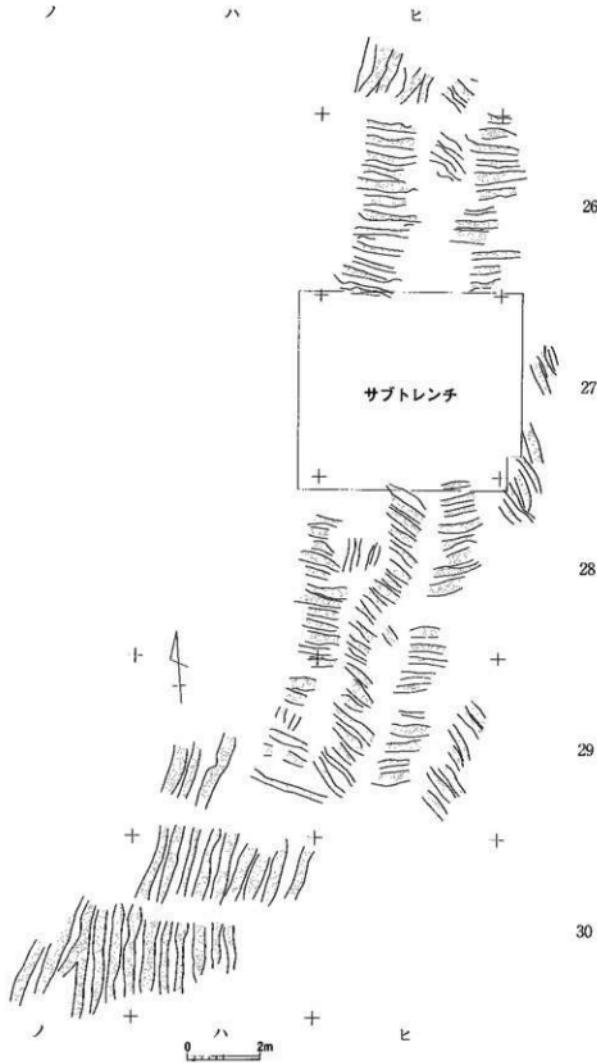
図版82 SS03 内出土遺物写真 土師器・石製品・鉄製品

陶磁器の検証も不十分なままであり多くの課題が残る」としながらも、都城盆地もしくは南九州東部における在地土器の変遷過程を解明する、一つの契機となったとみてもよい。少なくとも13世紀後半~14世紀初頭における在地土器編年に対し、一括資料を提供できたことは大きな成果とみてよい。詳細は付録に譲るが、今後、日本最大の荘園といわれた島津荘の歴史解明への一助として、当該資料が活用できるものと期待する。

(米澤)

(3) 遺構群の変遷と性格

調査が行われた部分は、おそらく集落の一部に過ぎないと考えられるが、それでも調査された面積は6,000m²強（水田を含むと8,000m²強）とそれなりの面積を有していることから、当時としては比較的広い範囲をもつた集落であったと想定できる。地形としては、大淀川によって侵食された河岸段丘崖に位置し、水田面である低位面よりやや高な段丘部分に調査部分の中心部が相当する。集落を構成する主要な遺構としては、総柱状の建物（大型掘立柱建物）、基壇状の遺構、回廊状の遺構、鍛冶遺構などが確認された。そのうち特に注目されるのは総柱状の建物SB01である。柱穴の直径、深さがともに70cmあり、底に根石を伴い、3間×4間に庇が付く構造をもっていた。このことからSB01は上部に比較的荷重に耐えうる構造が存在したことがうかがえ、かつ、小片、少数ながら、瓦が出土していることから、屋根材に瓦が使用されていたとも考えられる。また、基壇状遺構とみるSS02についても荷重に耐えうる上部構造の可能性をうかがわせる。以上の様相から、本遺跡内になんらかの信仰の対象物、もしくは倉庫的機能をもつ建造物が存在したと考えられる。高橋修によれば、中世前期の武蔵国熊谷の町は熊谷氏居館＝「宿所」にある始祖の堂を中心に、鎌倉大道に沿って展開しており、その「宿所」は寺院として興隆され、それは居館としての機能とは矛盾していなかった。こうした熊



第117図 ST01 実測図



ST01 検出状況
(北から)

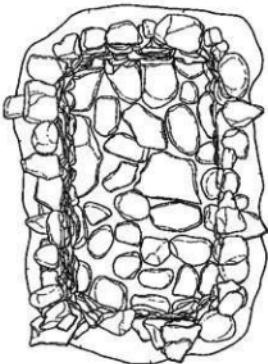


ST01 検出状況
(西から)

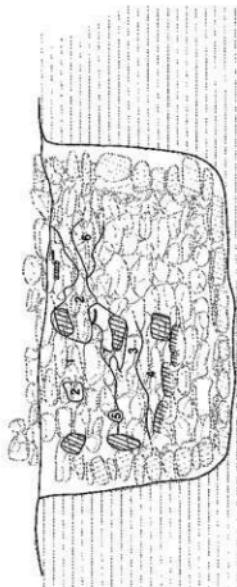


ST01 検出状況
(北から)

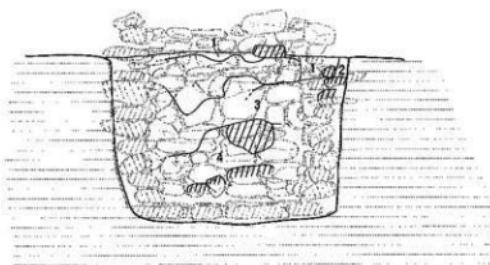
図版83 ST01 写真



147.2m



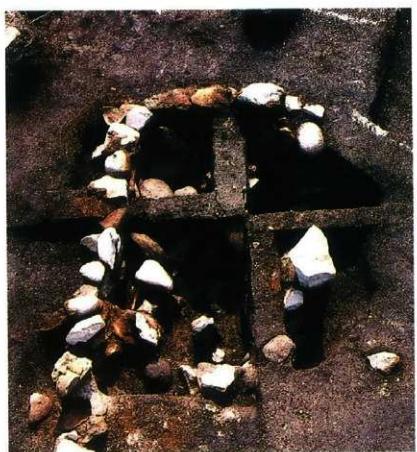
147.2m



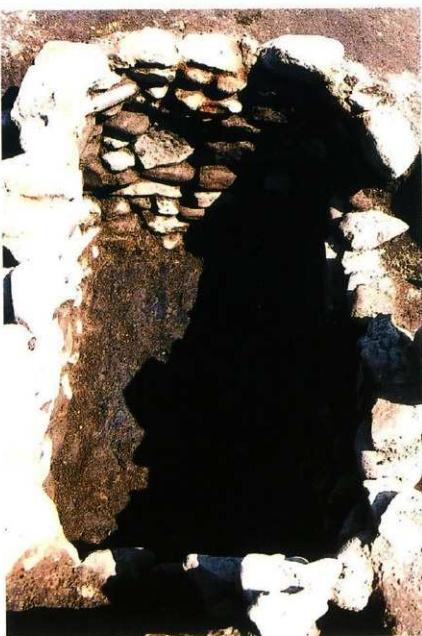
- 1 灰・オレンジバニス・少量の炭をまばらに含む暗褐色潤粘質シルト
- 2 灰・オレンジバニス・炭をまばらに含む灰オリーブ色粘質シルト
- 3 灰・オレンジバニス・炭をまばらに含む黒褐色粘質シルト
- 4 灰・オレンジバニス・炭をまばらに含む暗灰オリーブ色粘質シルト(粘性強)
- 5 灰
- 6 灰・オレンジバニス・炭をまばらに含む暗褐色潤粘質シルト
- 7 灰・オレンジバニス・炭をまばらに含む暗灰オリーブ色粘質シルト

0 1m

第118図 SR01 実測図



SR01 半掘状況

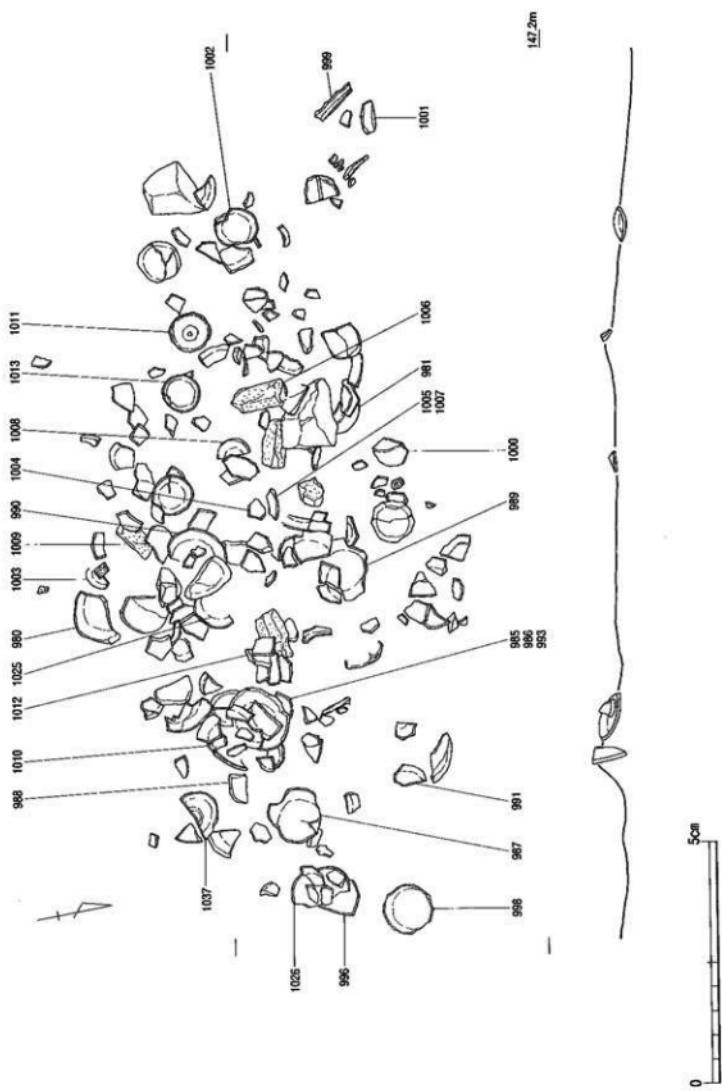


床面の黒色炭付着状況



SR01 完掘状況

図版84 SR01 写真



第119図 SX01 実測図



SX01 検出状況（北から）

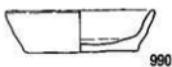


SX01 検出状況（南から）

図版85 SX01 写真



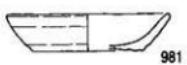
980



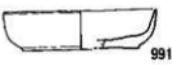
990



1000



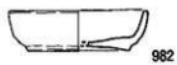
981



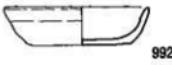
991



1001



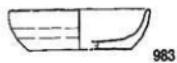
982



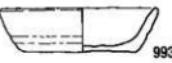
992



1002



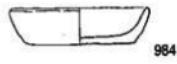
983



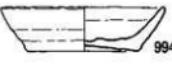
993



1003



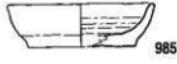
984



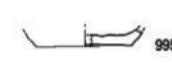
994



1004



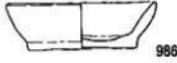
985



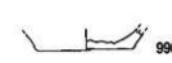
995



1005



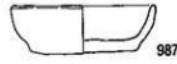
986



996



1006



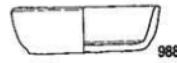
987



997



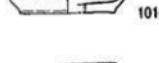
1007



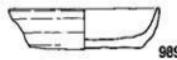
988



998



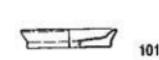
1008



989



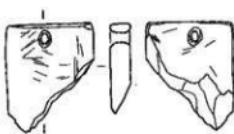
999



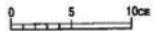
1009



1015



1016

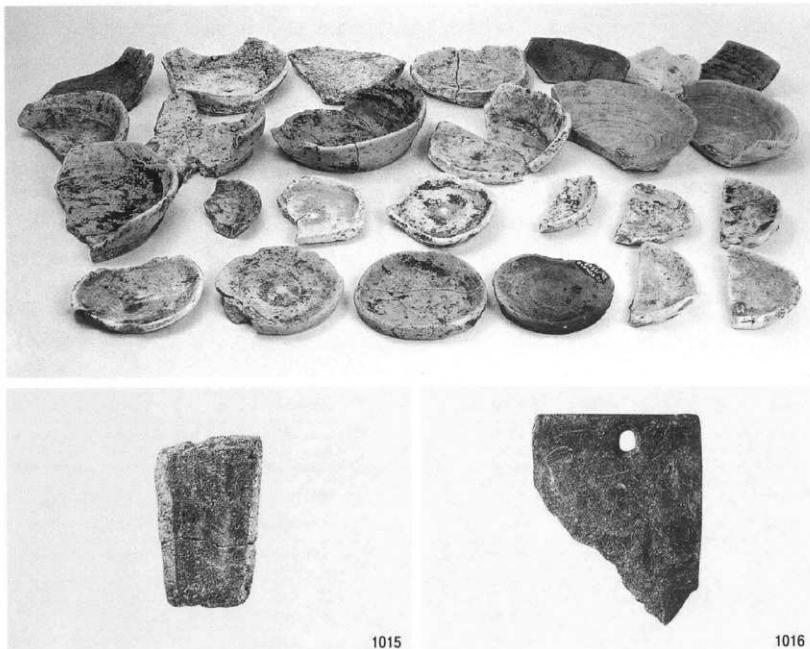


第120図 SX01 内出土遺物実測図 土師器・石製品

編號番号	種類	器種	出土層	地盤(外側)	地盤(内側)	色調(外側)	色調(内側)	胎土	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
980	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ→ナデ	浅黃褐色 (10YR8/4)	浅黃褐色 (10YR8/4)	1mm以下の粘土・砂粒	132	86	35	圓軸ナデ 内外青く鉄分付 反版復元
981	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に淡い青緑 (7SYR7/4)	に淡い青緑 (7SYR7/4)	1mm以下の粘土・砂粒	135	92	31	圓軸ナデ 反版復元
982	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黃褐色 (10YR8/3)	浅黃褐色 (10YR8/3)	1mm以下の粘土・砂粒	116	86	34	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
983	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黃褐色 (10YR8/3)	浅黃褐色 (10YR8/3)	2mm以下の粘土・砂粒	117	87	33	圓軸ナデ 内外薄く鉄分付者 鹿蹄 反版復元
984	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	1mm以下の粘土・砂粒	117	92	30	内外赤分付者 鹿蹄 反版復元
985	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に淡い青緑 (7SYR7/4)	に淡い青緑 (7SYR7/4)	1mm以下の粘土・砂粒 小石	122	89	35	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
986	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に淡い青緑 (7SYR7/4)	に淡い青緑 (7SYR7/4)	2mm以下の粘土・砂粒	125	91	38	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
987	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/3)	底白 (10YR8/3)	2mm以下の粘土・砂粒 小石	123	90	40	内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
988	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	1mm以下の粘土・砂粒	123	98	39	圓軸ナデ 内外鉄分付者 反版復元
989	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	2mm以下の粘土・砂粒	126	95	33	圓軸ナデ 反版正丸 内外鉄分付者 鹿蹄
990	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に淡い青 (7SYR7/4)	に淡い青 (7SYR7/4)	2mm以下の粘土・砂粒	126	95	34	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
991	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/1)	底白 (10YR8/1)	1mm以下の粘土・砂粒 小石	128	98	32	圓軸ナデ 内外青く鉄分付者 鹿蹄 反版復元
992	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ→指ナデ	浅黃褐色 (10YR8/3)	浅黃褐色 (10YR8/3)	3mm以下の粘土・砂粒	123	97	31	圓軸ナデ 指 扁状灰 黄褐色
993	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底 (7SYR7/6)	底 (7SYR7/6)	2mm以下の粘土・砂粒	133	97	36	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄
994	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底黄褐色 (7SYR8/4)	底黄褐色 (7SYR8/4)	2mm以下の粘土・砂粒	138	100	38	圓軸ナデ 扁状灰 黄褐色 反版復元
995	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/5)	底白 (10YR8/5)	3mm以下の粘土・砂粒	-	82	-	圓軸ナデ 切 斜状灰 土内薄く鉄 分付者 鹿蹄 反版復元
996	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底黄褐色 (7SYR8/3)	底黄褐色 (7SYR8/3)	ごく薄い底の粘土・砂粒	-	85	-	内外鉄分付者 鹿蹄
997	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (7SYR8/2)	底白 (7SYR8/2)	1mm以下の粘土・砂粒	-	86	-	圓軸ナデ 切 鹿蹄 反版復元
998	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (7SYR8/2)	底白 (7SYR8/2)	2mm以下の粘土・砂粒 小石	-	87	-	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄
999	土師器	环	SX01	圓軸ナデ→指ナデ	圓軸ナデ→指ナデ	底黄褐色 (7SYR8/5)	底黄褐色 (7SYR8/5)	1mm以下の粘土・砂粒	-	89	-	圓軸ナデ 内高く鉄分付者 指状 灰
1000	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	2mm以下の粘土・砂粒	-	93	-	圓軸ナデ 切 灰状灰 土内鉄分付 者 鹿蹄 反版復元
1001	土師器	环	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黃褐色 (10YR8/4)	浅黃褐色 (10YR8/4)	1mm以下の粘土・砂粒	-	104	-	圓軸ナデ 反版正丸 反版復元
1002	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黃褐色 (10YR8/3)	浅黃褐色 (10YR8/3)	1mm以下の粘土・砂粒	81	60	14	圓軸ナデ 反版正丸 内高く鉄 分付者
1003	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黃褐色 (10YR8/4)	浅黃褐色 (10YR8/4)	1mm以下の粘土・砂粒	80	60	17	圓軸ナデ 内外薄く鉄分付者 反 版復元
1004	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	1mm以下の粘土・砂粒	80	62	16	内外鉄分付者 鹿蹄
1005	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	2mm以下の粘土・砂粒	86	65	16	圓軸ナデ 扁状灰 土内鉄分付 者 鹿蹄 反版復元
1006	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底黄褐色 (7SYR8/3)	底黄褐色 (7SYR8/3)	2mm以下の粘土・砂粒	81	62	12	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
1007	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	1mm以下の粘土・砂粒	80	65	16	内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
1008	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底黄褐色 (7SYR8/3)	底黄褐色 (7SYR8/3)	1mm以下の粘土・砂粒	82	67	15	内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
1009	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/2)	底白 (10YR8/2)	2mm以下の粘土・砂粒	90	76	17	圓軸ナデ 反版正丸 反版復元
1010	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底 (7SYR7/6)	底 (7SYR7/6)	1mm以下の粘土・砂粒	96	80	15	圓軸ナデ 切 内外薄く鉄分付 者 反版復元
1011	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (10YR8/1)	底白 (10YR8/1)	2mm以下の粘土・砂粒	77	71	12	内外鉄分付者 鹿蹄
1012	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	に淡い青 (7SYR7/4)	に淡い青 (7SYR7/4)	1mm以下の粘土・砂粒	86	70	15	圓軸ナデ 内外鉄分付者 鹿蹄 反版復元
1013	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ	底白 (7SYR8/3)	底白 (7SYR8/3)	2mm以下の粘土・砂粒	89	76	13	圓軸ナデ 反版正丸 内外鉄分 付者
1014	土師器	小皿	SX01	圓軸ナデ	圓軸ナデ→指ナデ	底黄褐色 (7SYR8/6)	底黄褐色 (7SYR8/6)	2mm以下の粘土・砂粒	80	74	14	圓軸ナデ 切 - 鹿蹄ナデ 内外鉄分 付者
1015	磨石製品	-	SX01	-	-	-	-	-	34	22	11	16.7g 磨石軸-穿孔
1016	磨石製品	-	SX01	-	-	-	-	-	90	72	17	181.2g 穿孔-鉢底

第69表 SX01 内出土遺物観察表 土器類・石製品

谷の「堂」のような宗教的施設は、在地領主の始祖伝承を語りそのカリスマ性を補強しながら、「町場」に恒常に人を集め効果をも果たしていたという。また、高橋は在地領主自らが主導する新田開発の中で市町の整備が行われ、整備に必要な技術の集積基地として所領内の交通要地に寺院を開創したと指摘した（高橋修2002）。この見解を本遺跡に照合すれば、SB01のような建物構造は宗教的な施設とみることもでき、高橋が指



図版86 SX01 内出土遺物写真 土師器・石製品

摘したような集落もしくは「町場」に近い形態をしていた可能性もある。また交通体系とのかかわりについても、『庄内地理志』巻69に記載されている「横市村絵図」、及び『庄内地理志』巻70の記事によれば、猫田門または坪子門一帯に比定できる該地には、新宮城の前、猫田門・坪子門の間を抜け安永横市道へ通ずる間道「財部路」が存在している（都城市2003）ことから、中世において、交通の要地にこうした集落が開けていった様相をうかがうことができ、本遺跡もそのような一類型の集落遺跡であると想定できる。

次に遺跡の変遷を検討したい。先に示したように、陶磁器においては、太宰府編年によると、C期～G期の5期にわたっており、特にD～F期に盛行したことがうかがえる。また、土師器については、詳細は付編で触れるが、I期：特に造構を伴わない。12世紀後半～13世紀中頃。II期：SB03存在の時期。13世紀中頃。III期：【造構A群】の13世紀後半～14世紀初頭。IV期：【造構B群】の14世紀初頭～前半。V期：【造構C群】の14世紀前半～中頃。VI期：【造構D群】の14世紀中頃～後半と捉えた。この双方の検討に、さらに造構の要素を付加して変遷を推測したい。

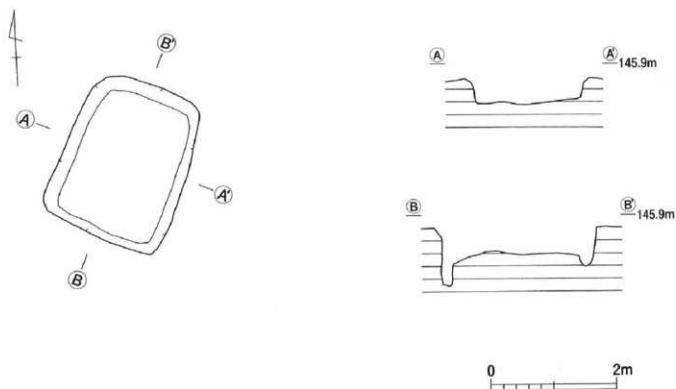
掘建柱建物の棟軸をもとに整理すると、おおよそ以下の3つの時期に区分が可能となる。

① S B 03・06・07・11・13・17・18・24・29・30・32・34

② S B 01・02・05・08・31

③ S B 04・06・09・10・12・13・15・16・19・20・21・22・28・33

これに土師器の出土状況を加味すると、①はⅡ～Ⅲ期、②がⅣ期、③がⅤ～Ⅵ期と捉えられる。さらに陶磁器の状況を付加してみよう。先に示したように出土陶磁器の時期は若干古い傾向がみられる。ただし、各々にE期、F期の磁器が間々みられ、また土師器の分析結果を組み合わせると、造構の相対年代は陶磁器の年代を幾分下げて考えたほうがよいであろう。そうした判断のもと陶磁器の様相を加味すると、①はD～E期、②は



第121図 SY01 実測図



左奥の窪みが完掘した SY01

図版87 SY01 写真